

フランス人と野蛮人

—— フェゴ人と向き合うポール・イヤード ——

伊 藤 進

1882年9月6日午前4時、南米大陸最南端に位置するティエラ・デル・フェゴ——大小数百の島からなる——のオステ島の南方にあるオレンジ湾に、3本マストの一隻の船影が黒々と認められた。船名は「ロマンシュ」La Romanche号と読める。船の全長は63メートル、150馬力の原動機を備えて、10ノットで航走し、200トノー（1トノーは約979キロ）の石炭を積載すればおよそ4000マイルを全速力で航行できるフリゲート艦だ¹。ロマンシュ号には、蒸気動力のボート1艘と捕鯨艇2艘が装備され、島に上陸するために家5棟分の建材が積みこまれている。ロマンシュ号は艦長のルイ＝フェルディナン・マルティアル Louis-Ferdinand Martial 以下、フランス人科学者や船員たち、総勢140名を乗せて、1882年7月17日にフランスの軍港シェルブールを出港、8月21日にはモンテビデオに寄港して、はるばるティエラ・デル・フェゴまでやってきたのだ。

前史

ティエラ・デル・フェゴの先住民²は黒い鉄の塊を目撃して、どう思っただろうか。じつはフェゴ人がヨーロッパ人を見たり接触したりするのはこれがはじめてではなかった³。

1520年にマゼラン Magellan（フェルナン・デ・マガリャンイシュ Fernão de Magalhães）一行は

¹ L.-F. Martial, *Mission scientifique du cap Horn. 1882–1883*, t. I : *Histoire du voyage*, Paris, Gauthier-Villars, 1888; Nabu Public Domain Reprints, p. 5. 以下、L.-F. Martial, I と略記する。

² 先住民は、セルクナム（別名オナ）、ハウシュ、アラカルフ（別名カウエスカー）、ヤマナ（別名ヤーガン）の四つの部族で、それぞれが異なったことばを話した。前二者は内陸部で狩猟採集を、後二者は沿岸部で漁撈を営む生活様式をとっていた。たとえば、L. Thomas, «Des peuples en voie de disparition : Les Fuégiens», *Cahiers d'outre-mer*, n° 24, 1953, pp. 379–398 を参照。

³ フェゴ人とヨーロッパ人との出遭いについては、基本的に、A. Chapman, *European Encounters with the Yamana People of Cape Horn. Before and After Darwin*, Cambridge, Cambridge U. P., 2012 (2010) を参照。

マゼラン海峡を通過するときに、海峡南の陸地に「おびただし数の火」⁴を見つけた。この多数の火は先住民ヤマナ族が暖をとるために絶やすことなく燃やしつづけていた焚き火とも、マゼランの船隊にめざとく気づいて発した警報の火ともいわれる。ティエラ・デル・フエゴ、「火の地」Tierra del Fuego の命名はこの逸話に由来するもので、1527年と1529年にはじめて地図上に、「煙の地」Tierra de los Humos とか「火の地」Tierra de los Fuegos として記載された⁵。おそらく記録に残されるヨーロッパ人とフエゴ人の接触はこれがはじめてであろう。

イングランド人初の世界一周を果たすことになる海賊フランシス・ドレイク Francis Drake はティエラ・デル・フエゴの先住民（ヤマナ族ないしアラカルフ族）に遭遇したとき（1578年）、先住民の手先の器用さと生活の知恵に舌を巻いた——以下の記述はかなり正確な描写らしい。

何人かを乗せたカヌーはいろいろな種類の木の樹皮から作られていた。船首と船尾の先端は三日月のかたちに湾曲していた。カヌーの本体は均整がもっともエレガントにとれていて、すばらしい細やかさと完璧な仕事で作られていた。このような小舟は熟達した技術力がなければ作りえないと艦長〔フランシス・フレッチャー Francis Fletcher, ドレイクの艦隊の艦長〕とわたしたちには思えたほどだ。それは粗野な未開人が使うためというよりは、王侯のような要人を喜ばすために作られたようだった。舟の継ぎ目や接合については、アザラシの皮やそうした類いの獣の皮でできた革紐で結ぶ仕方だけで、それでいて隙間がなかったの、水はほとんどといっていいくらいか、まったくしみこんでこなかった。

この丸木舟に乗った未開人はほどほどの背丈であったが、体格はよく筋骨たくましかった。すでに述べたほかの未開人たちと同様に、顔に色を塗るのは彼らにとって喜びであった。同島には粗末な住居があって、それは数本の杭に獣皮で覆われてできていた。内部には火と水と、ふだん入手している食料——アザラシの肉、ムラサキガイやほかの貝類——があった。

水を入れる壺と水飲みの茶碗は、カヌーと同じで、樹皮で作られている。しかも（こうしたものの大きさからすると）かたちの出来栄もよく、上品さの点でもとても巧みに作られていた。この種の作業で彼らが使う道具はムラサキガイの大きな貝殻（いかなる旅行家にもけっして思いつかない代物だ）——しかも中身はとても美味なのだ——で作られたナイフである。この貝殻の薄くて脆い端を取り払ってから、彼らはそれをこすり、石の上で研いで、わたしたちにも経験があるように遊びながら、堅い木でも切れるくらいに鋭利にするのだ。そのうえ、この道具でとてつもなく堅い骨を切って、魚を仕留める——大きな喜びと巧みさ

⁴ トランシルヴァーノ「モルッカ諸島遠征調査」、『マゼラン 最初の世界一周航海』長南実訳、岩波文庫、2011年所収、294頁。*La lettre de Maximilianus Transylvanianus (janvier 1523)*, traduit par A.-L. Darras-Worms, in *Le voyage de Magellan (1519-1522)*, éd. X. de Castro, Paris, Chandeigne, 2007, t. II, p. 900.

⁵ *Ibid.*, t. I, p. 377.

で彼らはおこなっている——ための^{もり}銛を作るのだ⁶。

このイングランド海賊の略奪行為を警戒して、スペイン王フェリペ二世はイングランドの海賊を遮断するために、ペドロ・サルミエント・デ・ガンボア Pedro Sarmiento de Gamboa を派遣した（1581–84年）。サルミエント・デ・ガンボアは3000人の部下を乗せた25隻の船団を率いて、マゼラン海峡沿いに植民地を形成していった。しかし、残された兵士や植民者は先住民に襲撃されて全滅した。なお、サルミエント・デ・ガンボアはマゼラン海峡をはじめて太平洋側から大西洋側に抜けた⁷。

1599年には、ネーデルラント人オリヴィエル・ヴァン・ノールト Olivier Van Noort とその部下が、マゼラン海峡の大西洋入り口にあるペンギン島——オレンジ岬（現プンタ・カタリナ）近く——南岸で、セルクナム族の集団を急襲した。食料用にペンギンを殺すために、ヴァン・ノールトは近くに投錨した。乗組員たちは25人か40人の先住民を殺害したが、女がひとりだけ生き残った。6人の子どもを捕らえて、ヴァン・ノールトはマゼラン海峡を太平洋側に向けて航行しつづけ、囚われの子どもたちはまもなく船上で全員が死亡してしまった。マゼラン海峡の中ほどで、同国人のセバルト・デ・ウェールト Sebald De Weert の一行はヴァン・ノールトと遭遇したのをさいわい、餓死寸前にあった自分たちを救援してくれるよう請うたが、ヴァン・ノールトはそれを拒絶、そのまま航行を続行した。なんとかオレンジ岬にたどり着いたデ・ウェールト一行は、そこで前述した生き残ったセルクナム族の女に出遭い、ヴァン・ノールトの犯した先住民殺害の事実を知ることになるのである。

時代は下って、若きフランス人技師デュプレッシ Duplessis が、1698年12月から1701年4月まで艦長ジャック・ド・ボーシェヌ Jacques de Beauchesne 率いる3隻の船団に乗船し、ヴェール岬（セネガル）、ブラジルの沿岸、マゼラン海峡、チリとペルーの沿岸、ガラパゴス諸島、アゾレス諸島を回航する。探検の目的は、南米にフランス植民地を根づかせるのを見越して、リオ・デ・ジャネイロ、ブエノスアイレスの都市だけでなくマゼラン海峡に関する商業上と地理上の情報、海上情報をフランス王ルイ十四世に報告することにあった。デュプレッシは日誌をつけていて、それには海岸や鳥や魚など多くの美しい水彩画が収められ、いまでも客観的な資料になっている。彼みずからが記述の真正さを保証して「読者への緒言」冒頭で述べているとおりである。

⁶ P. Hyades et J. Deniker, *Mission scientifique du cap Horn. 1882–1883*, t. VII : *Anthropologie, Ethnographie*, Paris, Gauthier-Villars, 1891; Nabu Public Domain Reprints, pp. 2–3. 以下, P. Hyades, VII と略記する。イヤーアの「緒言」によれば、パリ自然誌博物館司書ジョゼフ・ドニケール Joseph Deniker に「フエゴ人の解剖学的特徴と形態学的特徴に関する数章」(*ibid.*, p. VI), つまり第一章と第二章の共同執筆を担当するよう依頼し、ドニケールとともにこの『ホーン岬科学調査団報告書』第7巻全体を修正補筆したらしい。

⁷ P. Sarmiento de Gamboa, *Moi, gouverneur du détroit de Magellan. La première colonisation de la Terre de feu 1581–1584*, traduit par A. Roussel, Paris, Cosmopole, 2001.

「率直さでもって著されたこの日誌は楽しいものになっているはずで、表現は簡素、真実のみ述べることを基準とした」⁸。

1769年6月3日に金星が太陽面を通過するのを観測し、未知なる南方大陸（テラ・アウストラリス・インコグニタ）を発見するために、エンデヴァ号の艦長ジェイムズ・クック James Cook はティエラ・デル・フエゴをめざした。1769年1月11日にティエラ・デル・フエゴ島——正確に言えば、ティエラ・デル・フエゴ諸島でいちばん大きな島、イスラ・グランデを指すが、本稿ではイスラ・グランデを「ティエラ・デル・フエゴ島」「フエゴ島」とも記す——に近づくと、マゼランのときと同じように、「なんんかの原住民たちが、いくつかの場所で煙をあげているのを見る。船が通過すると止めてしまうところを見ると、われわれへの合図のつもりにちがいない」⁹。グッド・サクセス湾（ブエン・スセソ湾、フエゴ島の南東端）に投錨、上陸したキャプテン・クックたちを迎えた先住民（ハウシュ族）¹⁰は恐れたり驚く素振りを見せなかった——3人の先住民などは躊躇することなく船上に上がってきた。

〔原住民〕の背丈は中背よりやや高いくらいで、膚は暗い赤銅色。髪を長くのばし、身体に、主として赤と黒の塗料を縞模様にならしている。着物はグアナコ〔南米に広く棲息する駱駝科の哺乳類、ラマの一種〕かアザラシの皮だが、切りとったままの状態ですべて身につけている。女性たちは、恥部を皮の切れはしで隠しているが、男はそのようなつつしみぶかさを持たない。

原住民たちの住居は、蜂の巣のようなかたちであり、片側があいていて、そこで火をたく。家の材料は小さな棒切れに木の枝や長い草をかけたものであり、その作り方も、風やあられや雨や雪に耐えるものではなく、これを見ても、これらの人びとがひじょうに頑丈強壮な人種であることがわかる。食物とするのは、主としてムラサキガイのような貝類であり、これを海岸の岩場で採取するのは、女性の仕事のようなものである。〔中略〕

彼らは強い酒はたしなまず、われわれの食べるものも好きでないようだった。頭目とか首長のようなものは見あたらず、いかなる形の政府も持たなかった。ひとこと言えば、彼らは、今日地上に住むもっともみずばらしい民族である¹¹。

⁸ Duplessis, *Périple de Beauchesne à la Terre de Feu (1698-1701). Une expédition mandatée par Louis XIV*, texte établi et annoté par J. Boch, présenté par M. Foucard, Paris, Transboréal, 2003, «Avertissement au lecteur», p. 35.

⁹ クック『太平洋探検（一）』増田義郎訳、岩波文庫、2005年、62頁。

¹⁰ 増田義郎は「オナ族〔セルクナム族ともいう〕」とする。クック『太平洋探検（四）』増田義郎訳、岩波文庫、2005年、319頁、訳註（4）参照。

¹¹ クック、前掲書（一）、65-68頁。字句を一部改変させていただいた。

このようにクックは、フエゴ人は首長を戴かず政府もない、地上でもっともみすばらしい民族だといっているのだが、オーストラリアの先住民をも裸で歩き回る——男だけでなく女も恥部を隠さないことに驚いているが——、もっとも貧しい人びとだとみなしていた。しかし後者については、啓蒙思想家たちが西洋文明を批判するために用いた「善良な野蛮人」の概念を想起させるような評価に結びつけているところが興味深い¹²。

わたしがニュー＝ホルランドの原住民についていままで述べたことを読んで、地上でもっともみじめな人びとだと思いになる方もあるかもしれない。しかし、実際には、彼らはわれわれヨーロッパ人よりも、はるかに幸福なのである。ヨーロッパでひじょうに求められる過剰のないしは必要な便宜に関する知識をまったくもたないので、彼らはそれらを用いることを知らないという点において幸福である。彼らは不平等さの条件によって乱されない静穏さのうちに生きている¹³。

1774年の第二回世界周航で、キャプテン・クックは再びティエラ・デル・フエゴに立ち寄っている。グース島に投錨したレゾリュション号を先住民のヤマナ族が訪れてきた。

彼らは小さく醜くて、飢えかかった、ひげのない人種^{レイズ}である。彼らのあいだに背の高い人間を見たことがない。ほとんど裸身で、身につけるものといったらアザラシの皮しかない。〔中略〕大部分の者たちは、肩を覆うことすら充分でない一枚の皮を着ているにすぎなかった。そして下のほうはまったくむき出しにしていた。女性は小さなアザラシの皮で恥部を覆っているとのことである¹⁴。

これは第一回の世界周航のときに遭遇したセルクナム族とほぼ同じ描写であるが、「彼らおよび彼らの身邊にあるすべてのものは、ほとんど耐えがたい鯨油の臭いがする」とか、「彼らはからだが汚く、ひどい悪臭を漂わせている」¹⁵とか、フエゴ人の放つ悪臭に対する嫌悪が表明されていることに気づかされる。

そしていよいよチャールズ・ロバート・ダーウィン Charles Robert Darwin の登場だ。ただしそのまえに、ダーウィンと同じビーグル号に乗り合わせた3人のフエゴ人に触れておかなければならない。キャプテン・パーカー・キング Parker King 指揮下の軍艦アドヴェンチャー号とビー

¹² 多木浩二『船がゆく——キャプテン・クック 支配の軌跡』新書館、1998年、245頁。

¹³ クック『太平洋探検（二）』増田義郎訳、岩波文庫、2004年、246-247頁。

¹⁴ クック、前掲書（四）、293頁。

¹⁵ 同上、294頁、295頁。

ゲル号による第一回の探検航海（1826-30年）のとき、船長ロバート・フィッツロイ Robert Fitz-Roy はヤマナ族の成人の男ふたり、および少年と少女をひとりずつ、計4人を捕らえてイギリスに連れ帰った（1830年10月）。うちひとり（イギリスに着いてすぐに天然痘で死亡してしまった。ジェミー・バトン（ボタン）——真珠のボタンと引き換えに買われたことから、このイギリス人名を与えられた少年——は、ヨーク・ミンスターと名づけられた成人男性、フエジア・バスケットと名づけられた少女——このふたりはのちに帰国してから結婚した——とともにロンドンに連れて行かれ¹⁶、ウォールサムストンの寄宿学校で英語や造園などを学び、イギリス式の生活に馴染み、国王ウィリアム四世と王妃に謁見して、地の果てから来た野生人として大きな話題になった。フィッツロイはこれら3人の未開人を「キリスト教化」「文明化」してから故国に帰還させるつもりだった。これが、フィッツロイ船長が二度目の航海（1831-36年）を引き受けた大きな動機のひとつだったのだ。フィッツロイが彼らを故郷のウライア（ナバリノ島の西海岸）に戻してから（1832年）、随行したダーウィンはティエラ・デル・フエゴの周辺海域の生態系および地質学的な調査に着手し、その成果を『ビーグル号航海記』*The Voyage of the Beagle*（1839年）として発表することになる。

さてそこで『ビーグル航海記』を開いてみると、フエゴ人の風俗習慣や文化に関する、いわゆる文化人類学的な情報にあふれていることに一驚するに違いない。ダーウィンはフエゴ島に上陸（1832年）して、フエゴ人を見ての最初の印象はこうだ。「文明人と未開人とのあいだにこれほどの違いがあったとは、とても信じられなかった。その差は野生動物と家畜のそれよりも大きい」¹⁷。さらに、彼らの悲惨な情況を書き記している。

ある日ウォラストン島付近の海岸へ行く途中、6人のフエゴ島民¹⁸が漕ぐカヌーといっしょになった。これまでに見たこともないほど醜くてみじめな人たちだった。〔中略〕カヌーに乗ったフエゴ族は丸裸で、成熟した女性ですら糸もまとっていなかった。ひどい雨降りの日で、飛沫とともに雨水が彼女の体を伝い落ちていた。〔中略〕この不幸な民は成長しきれずにひねていた。醜い顔は白い塗料で塗りたくられ、膚は汚れて脂ぎっていた。髪は乱れ放題だし、声もしわがれ、身ぶりが荒あらしかった。こういう人びとを眺めると、彼らが同じ

¹⁶ フィッツロイはイギリスに連れ帰った4人のイギリス人名と推定年齢を記録しているが、それによると、ヨーク・ミンスター York Minster が26歳、死亡したボート・メモリー Boat Memory が20歳、ジェイムズ〔ママ〕・バトン James(sic) Button が14歳、フエジア・バスケット Fuegia Basket が9歳である。R. FitzRoy, *Narrative of the surveying voyages of His Majesty's Ships Adventure and Beagle between the years 1826 and 1836*, vol. II, London, Henry Colburn, 1839, p.4. <http://darwin-online.org.uk> にアクセス（2018年6月9日）。バトンについては、N. Hazlewood, *Savage. The Life and Times of Jemmy Button*, New York, St. Martin's Press, 2001 を参照。

¹⁷ ダーウィン『ビーグル号航海記』上、荒俣宏訳、平凡社、2013年、383頁。

¹⁸ 場所からして、たぶんこれはヤマナ族であろう。

この世にすむ同類というか、仲間だとは信じられなくなる¹⁹。

フエゴ人を同じ人間の仲間だとはとても信じられないダーウィンは、先住民をついにオランウータンに引き比べてしまうことになる²⁰。

また、先住民が人喰いであるという証言をジェミー・パトンらから得て、ダーウィンたちはそれが真実であると安直に鵜呑みにしている。後段で改めて見るように、フエゴ人の食人説は以後ヨーロッパ人によって執拗に反芻される「神話」になるだろう。

すなわち冬季に飢えた人びとは、犬を殺すよりも先に老女を殺して食べるのだ。〔なぜかという問いにアザラシ狩り名人に雇われた少年が答えるに〕「犬はカワウソを捕まえる。おばばは捕まえない」と。この少年は老女がとり押さえられ煙にかざされ、窒息死するまでのプロセスを説明した。彼はたわむれに、悲鳴の真似をしてみせ、人肉のどこがいちばんうまいかも教えてくれた。友人や親戚たちの手で殺されるおそろしさを思うにつけ、飢えが切迫したとき老いた女たちが味わう恐怖というものは、想像を絶するほど痛切であるに違いない。ときによると老女たちが山に逃げ込むこともあると聞いた。それでも女たちは村人に追跡され、火が燃える殺人小屋に連れ戻される！²¹

ダーウィンはフエゴ人の生活と文化を観察したうえで総括する。「進化のすすんだ種ほど自分たちで築きあげた統制システムをもっている」、換言するなら、「力の強い首長」をもってこそすぐれた「文明段階」に到達できると考えるダーウィンにとって、「たとえ一片の布切れでも一人に与えられると、小さくちぎって全員に分配されるので、だれかが他人よりも裕福になれないようになっていく」、つまりは「部族内で各人が完全に平等に扱われて」いるフエゴ人は「世界のどこよりも低い文明状態にいる」²²ことにしかならないのである。帰郷した3人のフエゴ人を見て、ダーウィンは、「[この3人が] たった3年だけ文明人とともに暮らしたが、そのあいだに身につけた習慣を失わないでくれれば、ほんとうにうれしかったのだが、それはどう考えても無理のようだ。彼らが文明国を訪れたことが、ここでなにかの役に立つだろうとは、とうてい思えないのだ」²³と心情を吐露しているように、彼はフエゴ人が最後まで未進化で改善しえないという見方を変えることはなかった²⁴。そればかりか、進化論を構築してからずっと後年には、ダーウィ

¹⁹ ダーウィン、前掲書、397頁。

²⁰ 同上、390頁。

²¹ 同上、399-400頁。

²² 同上、425-426頁。

²³ 同上、420頁。

²⁴ G. Radick, «Did Darwin change his mind about the Fuegians?», *Endeavour*, vol. 34, n° 2, 2010, pp. 51-54.

ンはフエゴ人に対してよりあからさまな侮蔑の言辞を投げつけるのである。『人間の由来』 *The Descent of Man* (1871年) の結論の一節である。

われわれが未開人の子孫であることに疑問の余地はない。ごつごつした荒れた海岸でフエゴ島人たちははじめて見たときの驚きを、わたしは一生忘れないだろう。わたしのところにすぐにも湧いた考えは、これこそがわれわれの祖先の姿だというものだった。これらの人びとは、まったくの裸で、からだに絵の具を塗り、長い髪の毛がからまって、彼らの口は興奮で泡を吹き、表情は野蛮で、驚愕し、われわれを疑っていた。彼らはほとんど芸術と呼べるものは持っておらず、野生動物と同じように、自分たちが捕まえられるものを食べて暮らしていた。彼らには政府もなく、自分の小さな集団に属している人びと以外に対してはみじんの愛情も持っていなかった。未開人をその現住の地で見たことのある人なら誰でも、彼らよりさらに下等な生きものの血が自分たちのからだに流れていると認めさせられても、それほどの恥ずかしさは感じないに違いない。わたし自身は、自分の敵を責めさいなむことに喜びを感じたり、血塗られた犠牲を捧げたり、後悔の気持ちもなく子殺しをしたり、自分の妻を奴隷のように扱ったりし、何の礼儀もなく、恐ろしい迷信に取りつかれている未開人の子孫であるよりは、飼育係の命を救うために恐ろしい敵に向かっていった、あの小さな英雄的な猿や、山から駆け降りて、自分たちの子どもを驚いた犬の群れから意気揚々と救い出した、あの年老いた狒々たちの直接の子孫であったほうがましだと思いたい²⁵。

ダーウィンは最後までフエゴ人のことを忘れることはなかったばかりか、「野蛮人のなかでももっとも下位に位置する」²⁶フエゴ人への誤解を解くこともなかったのである。

このビーグル号航海は副産物をもたらした。それは、1844年に、ビーグル号の元航海士アラン・ガーディナー Allen Gardiner がフエゴ人に福音伝道を目的とするパタゴニア伝道会 Patagonian Missionary Society (後年1865年に南米伝道会 South American Missionary Society と改名) を設立し、布教活動を開始したことである。1869年にフエゴ島のビーグル水道北岸にウシュアイアの伝道所が開設されて、宣教師トマス・ブリッジズ Thomas Bridges——1880年代からティエラ・デル・フエゴにやってくる国際的な科学者に便宜をはかった功績は大きく、とくにヤマナ語 3万2000語を集めた『ヤマナ語英語辞典』 *A Dictionary of the Speech Yamana-English of Tierra del Fuego* を完成させた (出版は1933年) ——が1871年に着任したのが、フエゴ島初の白人定住

²⁵ ダーウィン『人間の由来』下、長谷川真里子訳、講談社学術文庫、2016年、491-492頁。原文は、Ch. Darwin, *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*, New York, D. Appleton and Company, 1889 (new ed.), pp. 618-619. <http://darwin-online.org.uk> で閲覧できる。富山太佳夫「ビーグル号の野蛮人」、『オサルの系譜学——歴史と人種』みすず書房、2009年所収、262-269頁は有益なエッセーである。

²⁶ ダーウィン『人間の由来』(上掲書)上、53頁。

者となった。1898年に死去するまで、彼はティエラ・デル・フエゴを離れることはなかった。これ以降、ティエラ・デル・フエゴの先住民とヨーロッパ人の接触が定期的におこなわれるようになった。

ちなみにその後、南米伝道会の後塵を拝するかたちで、サレジオ会（1859年にドン・ボスコ Don Bosco 師によりトリノに創設）が先住民にキリスト教を布教すべく、ドーソン島（チリ領）およびフエゴ島リオ・グランデに伝道会を設立した。ウシュアイアの伝道所とともに、これらの伝道所は入植者らによる殺戮の避難所を先住民に提供し、彼らを文明化することにも努めたものの——文明化 *Civilisation* と布教 *Christianity* という、いわば「二重の C ストラテジー」²⁷——、かえって、入植者やヨーロッパ人が持ち込んだ病気（結核、インフルエンザ、麻疹^{はしか}など）がこれら閉塞した伝道所で広まり、ついに伝道所は閉鎖を余儀なくされ、まもなくフエゴ人は絶滅への一途をたどることになる。

フランス人とフエゴ人の接触

したがって、ティエラ・デル・フエゴの先住民がロマンシュ号の船影を目にしても、警戒こそすれ、それほど恐れも驚きもしなかったかもしれない。

140名のフランス人がなぜ地の果てティエラ・デル・フエゴを訪れたのか。じつは、1882年12月6日に太陽の正面を金星が通過するという珍しい天体現象を観察するのを目的として、ヨーロッパ11か国とアメリカが参加するホーン岬科学調査団なるものが結成されることになった。フランスはその分団として極地からこの天体観測と測地学的な調査をおこなうべく、海軍省と公教育省の肝煎^{きもい}りで調査団を編成したのである²⁸。フランス科学調査団長にしてロマンシュ号艦長のマルティアルは、「ふたつの明確なミッション」を託されたことを報告している。ひとつは、国際極地調査派遣にあたって割り当てられたホーン岬周辺でのさまざまな観測（金星の太陽前面の通過、地磁気、気象の観測など）、もうひとつは、この地域の水路測量、医学、自然誌（博物学）の研究であった²⁹。こうして多くの観測器材を積載したロマンシュ号は1882年9月にオレンジ湾に投錨したのだった。この地点が選ばれたのは、ホーン岬とは指呼^{かん}の間にあり、安全に停泊できること

²⁷ A. Chapman, *op. cit.*, p. 481.

²⁸ 国際極地調査派遣については、S. Barr and C. Lüdecke (eds), *The History of the International Polar Years (IPYs)*, Heidelberg, Springer, 2010, pp. 7-126 を、科学調査における学術機関の重要性と果たした役割（旅行家への質問表によるアンケート、測定数値の優先、蒐集方法）については、S. Venayre, *Panorama du voyage (1780-1920)*, Paris, Les Belles Lettres, 2012, pp. 232-250 を参照。

²⁹ L.-F. Martial, «Rapport sur l'expédition française du cap Horn», in Académie des sciences, *Mission scientifique du cap Horn. 1882-1883. Rapports préliminaires*, Paris, Gauthier-Villars, 1884, p. 2.

にあった。湾の土壤が地磁気観測に適していることを確認したうえで、調査団は二班にわかれ、いっぽうの21名（科学者6名と作業をサポートする15名）が陸に上がって金星の通過と潮汐の計算にあたりながら、地磁気観測、気象学と気象電気の観測をおこない、自然誌（動物学、植物学、人類学）の研究にも従事した。もういっぽうの班は海上にあって、ロマンシュ号でティエラ・デル・フエゴ南方に位置する島嶼の水路測量を実施した。先住民との接触がもっとも濃密だったのは、イヤード博士が担当する自然誌と民族誌の領野であった。イヤードによる人類学的・民族誌学的な観察と蒐集をもとに著された報告書のおかげで、フエゴ人、とくにヤマナ族とフランス人たちとの接触の実態が今日も知られるのである。この接触と交流を見ていくまえに、このイヤードとはいかなる人物だったのかを一瞥しておこう。

ポール＝ダニエル＝ジュール・イヤード Paul-Daniel-Jules Hyades は1847年1月15日にマルセイユで生まれ、トゥーロン海軍医学校で学業に励み、23歳で医学学位論文の公開審査を受けている。最初の任務は、1874年にインドからグアドループ（カリブ海、小アンティル諸島中部にあるフランス海外県）への移民船に医師として乗船することだった。その後志願して、当時政治犯などの流刑地であったニューカレドニア——パリ・コミューンの叛乱（1871年）後、^{コミューナール}叛乱の参加者が5000人ほどここに流刑された——に徒刑囚輸送船団について赴いている。健康を害したあとは、1879年にパリに上京、海軍医学校で教授職の試験準備をする。衛生監察局 Inspection générale du service de santé 付きで、1882年までそのままパリに留まる。イヤードが人類学の環境とつながりをもったのはこの時期である。1879年にパリ人類学学校（1876年創立）医療地理学教授アルチュール＝アレクサンドル・ボルディエ Arthur-Alexandre Bordier の支持を受けてパリ人類学協会 Société d'Anthropologie de Paris³⁰ 会員となり、医学界の有力な代表的人物がいるこの環境で、医師フェルナン・ドリール Fernand Delisle や生物学者アルマン・ド・カトルファージュ Armand de Quatrefages などと出遭い、彼らから人類学の素養を得るうえで大きな影響を蒙ることになる。したがって、たとえ1881年にパリの順化園で見世物にされたフエゴ人（アラカルフ族）³¹ を見学しなかったにせよ、フエゴ人をめぐって人類学協会で交わされた論議のことはよく知っていたはず

³⁰ この協会については、J.-C. Wartelle, «La Société d'Anthropologie de Paris de 1859 à 1920», *Revue d'histoire des sciences humaines*, n° 10, 2004, pp. 125–171 を参照。

³¹ 挙げるべき文献は多いが、主要文献のみ掲げておく。M. L. Manouvrier, «Sur les Fuégiens du Jardin d'acclimatation», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. IV, 1881, pp. 760–790 ; A. Chapman, C. Barthe, et Ph. Revol, *Cap Horn 1882–1883. Rencontre avec les indiens Yahgan*, Paris, Edition de la Martinière, 1995, pp. 27–38; Ph. Revol, «Observations sur les Fuégiens : du Jardin d'acclimatation à la Terre de Feu 1881–1891», in C. Blanckaert (dir.), *Le terrain des sciences humaines. Instructions et Enquêtes (XVIII^e–XX^e siècle)*, Paris, L'Harmattan, 1996, pp. 243–296, とくに pp. 243–258 ; P. Mason, *The Lives of Images*, London, Reaktion Books, 2001, pp. 19–54 ; C. Baez et C. Barthe, «Sous le regard des scientifiques, Paris-Berlin-Zurich-Ushuaia (1881–1883)», in *Patagonie. Images du bout du monde*, Arles/Paris, Actes Sud/Musée du quai Branly, 2012, pp. 79–86.

である³²。ホーン岬科学調査団への参加は彼の研究者としての経歴に新たな道を拓くことになった。帰国後も職務が許さざり人類学研究に没頭し、それはティエラ・デル・フエゴのオレンジ湾到着から始まり、『パリ人類学協会会報』などに15本ほどの論文を発表するまでつづく。ヤマナ族の人類学的・民族誌学的な研究は『ホーン岬科学調査団報告書』*Mission scientifique du cap Horn. 1882-1883, t. VII :Anthropologie, Ethnographie*, (以下、『報告書』と略記)第7巻(1891年)の刊行で終わる。これ以降彼は学問的なステージから決定的に退くだろう。イヤードは1890年にマルセイユに戻り、結婚、一子をもうける。1883年12月18日にレジオン・ドヌール勲章^{シュヴァリエ}を、1897年12月12日にレジオン・ドヌール勲章^{オフィシエ}4等勲章を佩用された。パリに再び戻って、第一次世界大戦中には海軍省のミッションに従事したらしい。1919年12月5日にパリで死去した³³。

フランス科学調査団とフエゴ人の最初の出遭いの様子は調査団長のマルティアルの記述によって知られる³⁴。9月6日にオレンジ湾に投錨した翌朝に、先住民15人ほどが2艘のカヌーで近づいてきてロマンシュ号^{ロマンシュ}の舷側に横づけた。フランス人が彼らに乾パンを投げてやると、フエゴ人はそれらを貪り喰った。ひとりの男が甲板に上がると英語の単語を発したので、この先住民は以前にも文明人と交流したことがあるとわかった。さらに、小柄で不恰好なうえに、素っ裸の男が梯子を上ってきた。その足取りはのろのろとして、体は前屈みになっていた。その男の髪は長く、撫でつけられたように皮膚に張り付き、顔の上まで垂れていた。その顔ときたら、汚れと顔に塗る染料で覆われて素顔を見定めがたかった。まさにチャールズ・ウィルクス Charles Wilkes (アメリカの探検家で、1838年にティエラ・デル・フエゴを訪れている)やダーウィンが描いたままだ、とはマルティアルの感想である。カヌーには、敷きつめた枯れ草の上で、男たちと女たちが絶やすことなく燃えつづけている火の周りで体を寄せ合ってうずくまっていた。カヌーの火について付言すれば、ヤマナ族のカヌーには、暖をとるために必ず火が焚かれていた。土と小石と貝殻でできた板状のものをカヌーの真ん中に置いて、その上で火を焚くのでカヌーの底を焦がすことはない³⁵。男たちと同様、女たちはカワウソの皮を肩に掛けているだけだった。黒く塗りたくった顔をした女たちもいて、彼女らは裸の子どもを両足ではさんでいた。その子どもたちはといえば、フランス人を見て泣き声をあげていた。先住民は寒さに苦しんでいるようで、哀れっぽい声で乾パンをくれとつねに哀訴していた。古着を投げてやると、すぐにそれらを着込んだ。こうして日がな一日、先住民はロマンシュ号の横で過ごし、日が暮れるまえに陸地に帰っていった。

³² «Discussion», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. IV, *cit.*, pp. 774-790 ; «Discussion sur les Fuégiens», *ibid.*, pp. 841-868 ; *ibid.*, t. V, 1882, pp. 12-22.

³³ イヤードの経歴については、全面的に A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p.89 に負う。ただし、イヤードがマルセイユではなく「パリ、植物園通り66番地」で死去したことは12月10日付「死亡告示」(Base Léonore)でも明らかなので、ここではそのように修正した。

³⁴ L-F. Martial, I, pp. 30-31.

³⁵ P. Hyades, VII, p. 332.

そもそもヤマナ族はずっと以前からオレンジ湾に頻繁に出入りしていた。そこは強風が遮られていたし、アザラシ、アシカ、魚、海鳥、貝類など資源も豊富だったので、ノマドのヤマナ族にとってはお気に入りの仮寓地のひとつだった。カヌーで移動生活を送るがゆえに「カヌー先住民」«Indiens de canots»と呼ばれていたアラカルフ族とヤマナ族が、ここにひっきりなしに姿を現していた。規則的に30人から40人ほどのヤマナ族が集まってきて、結局は年間を通じて300-400人に達するヤマナ族が訪れたという³⁶。当時の雑誌記事によると、順化園でフエゴ人が見世物になったときにフランス人がかき立てられた好奇心と似たような物珍しさで、先住民たちもまたフランス人を迎えたいらしい³⁷。フエゴ人の好奇心は陸揚げされた大量の資材、観測器材、見たこともない動物（牛2頭、羊16頭）などに向けられていた。マルティアルによれば、先住民が上陸した団員たちを手伝ってくれたことは来るべき関係の吉兆であり、謝礼のしるしに少しばかりの乾パンを彼らに与えた³⁸。とはいえ、マルティアルは先住民が攻撃を仕掛けてくるのを当初は警戒して——なにせ敵意ある野生の世界に取り囲まれた文明を守らねばならないのだから——、「6か月分の備蓄と銃15丁、ピストル5丁」を用意していた。所詮は杞憂に終わったのだが³⁹。

ウシュアイアの伝道所で先住民への布教と保護に努めたトマス・ブリッジズについては前述したところだが、彼と妻とのあいだには三男二女が生まれていた。その次男ルーカス・ブリッジズ Lucas Bridges はウシュアイアで先住民に混じって育った思い出を『地球のいちばん遠いところ』*Uttermost Part of the Earth*（1948年）として発表した。これはいまや、ティエラ・デル・フエゴの先住民の風俗習慣を知る基本書となっているが、ルーカスはフランス科学調査団の到来についても、父親トマスの残した記録・メモなどをもとに書きとどめている——1874年に生まれたルーカスは当時10歳になるかならぬかの少年であった。到着当初のフランス人と先住民との関わりを窺い知るうえでも貴重であろう。それによると、オレンジ湾は「岩だらけの、降雨で洗われたもっとも荒涼とした場所のひとつ」で、フランス人は上陸するやすぐに仮小屋を建て、望遠鏡などの器具を保管する小屋も建てた。「科学者たちは蟻のように忙しく立ち働き、栄光を求めたり、仰天させるような冒険を試みたりする者はだれひとりとして存在せず、ひたすら慣れぬ気象条件のもと絶えず活動していた」。立派な気象観測所を構えて、気象学を研究し、陸海の植物や動物を調査した。それぞれの研究班には教授か学者が参加していて、「医学博士もふたり〔イヤードとフィリップ・アーン Philippe Hahn〕いて、彼らがヤマナ族の研究を実施した。これにはわたしの父の助けがひじょうに貴重なものだった」。科学調査団がちょうどオレンジ湾に到着した頃、オレンジ湾の北数百キロに位置するウシュアイアでは病が広がっており、たった一か月のあいだ

³⁶ Ph. Revol, «Observations sur les Fuégiens : du Jardin d'acclimatation à la Terre de Feu 1881-1891», *cit.*, p. 261.

³⁷ *Ibid.*

³⁸ L.-F. Martial, I, pp. 33-34.

³⁹ *Ibid.*, p. 49.

に小さな共同体で8人が死亡していた。フランス人の到着を先住民から漏れ聞いたトマスは、医師の助けを請いにオレンジ湾にやってきた。トマスと一緒にウシュアアイに来てくれたのが、ふたりの医師のひとり、イヤードだった。「イヤード博士は朝から深夜まで先住民のもとに診察に来て、四日間をウシュアアイで過ごした。その間、イヤード博士は麻酔を使わないで外科手術を四回おこなった」。そのうちの一回は、老人の片方の眼を摘出し、もう片方の眼は見えるようにする手術だった。その患者は痙攣したようにトマスの手を握りしめていたが、痛みを見せまいと必死にこらえていた。「イヤード博士は義務を完璧に果たして、オレンジ湾に帰っていった」⁴⁰。これがイヤードとトマス・ブリッジズの出逢いであり、ふたりの手紙での交流はイヤードの帰国後もつづくことになろう⁴¹。

さらに先住民との交流に関して、ルーカス・ブリッジズはおもしろいエピソードを紹介している。フランス人が先住民の慣習に関心をもってにせよ、先住民もそれに劣らずフランス人に対して好奇心を寄せていた。先住民の多くは大の物まね好きで、フランス人をじっと観察しては自分たちの注意を引いた奇妙な物腰をまねるのだ。ある先住民男性はとくに美男子というわけでもないが、その逞しさと大胆さで目立っていた。フランス人は彼を「ジャックナイフ」と呼んだが、本人は「イエカイフ」Yekaifのほうを好んだ。短縮したほうがしゃれていると思ったのだ。もう何度も、彼はアメリカ人のスクーター（2本マストの帆船）に乗ってはアザラシ猟に出かけ、シーズンが終わるとアザラシの脂肪と油を持ち帰っていた。そうこうするあいだにイエカイフはスペイン語と英語の単語をごた混ぜにして覚えた。明らかに自分のほうがすぐれていると見せつけるためと、自分の話に箔を付けるために、仲間と話すときですらそれらのことばと母語を混ぜ合わせて喋るのである。イエカイフは賢くて世話好きな男だったので、ガイド兼通訳としてフランス人に重宝がられた⁴²。早晚彼はフランス語の気の利いた間投詞を覚えて、ヤマナ語とスペイン語と英語のわけのわからないことばにそれを付け加えた。フランス人の話し方や癖を最初はおもしろがってまねしていたのが、しだいに身についてしまい、イエカイフは話すたびに手を広げ、掌を上方と話し手のほうに向けた。それから後ずさりしながら、喜劇役者も羨むくらい奇妙奇天烈な動きでもって肩をすくめてみせるのだった。こうした超フランス人的な動作がついに彼にはごく自然なものとなってしまい、彼自身がもはや気づかないままにそうした動作をしている

⁴⁰ E. Lucas Bridges, *Uttermost Part of the Earth. A History of Tierra del Fuego and the Fuegians*, New York, Rookery, 2007, pp. 113–114; *id.*, *Aux confins de la terre. Une vie en Terre de Feu (1874–1910)*, traduit par M. L'Hénoret, Bruxelles, Edition Nevicata, 2013 (2010), pp. 138–139.

⁴¹ 一例として、1884年2月21日の会議で、イヤードは「フエゴ民族誌学試論」を発表、そのなかでブリッジズの功績を高く評価し、つづけてブリッジズの「フエゴ人の風俗と習慣」を紹介している。*Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VII, 1884, pp. 147–168; 169–185を参照。

⁴² L.-F. Martial, I, p. 45. マルティアルが「ヤカイフ」«Yakaif»と表記するこの先住民の評価はルーカス・ブリッジズのそれより高く、英語をかなりじょうずに話し、手渡した本もかなり流暢に読んだ、と感心している。

のだった⁴³。

こうしてまもなく、フランス科学調査団がオレンジ湾に逗留するあいだに、調査団員たちは近隣のヤマナ族と良好な関係を築いていったのだが、それでもヤマナ族へのフランス人の第一印象はかなり辛辣なものだった。イヤードは帰国後にまとめた回想録のエッセー「ホーン岬の一日」*«Une année au cap Horn»*（雑誌『世界一周』*Le Tour du Monde* 第1276号、1885年所収）で「この奇妙な被造物」の第一印象をこう書いている。「オレンジ湾逗留の最初の数か月のあいだは、先住民は人類の中でもっとも恵まれない、かつその知的欠如からして獣にもっとも近い存在であるようにみえた」⁴⁴。これではダーウィンの観察とのあいだに径庭はない。また、調査団長マルティアルの第一印象も同様に手厳しいものだった。「いま目の前にしている者よりも痛ましい人種の典型を思い描くことはむずかしい。その後わたしたちの当初の印象は大きく変化したけれども、はじめて彼らに遇った探検家たちに与えた印象がどのようなものだったかは理解できる。探検家たちがこの哀れで不遇な人種に下した判断が容赦なかったのは、おそらくこの第一印象のせいである」⁴⁵。これもダーウィンの下した判断を想起させるけれど、後半の文はマルティアルの第一印象がやがて変わっていったことを示唆するであろう。

実際やがては、物珍しさから頻繁に訪れる先住民はフランス人調査団員たちの旅の仲間ともなれば愛人ともなり、団員たちにとってはありがたいことに写真のモデルにもなれば人類学上の標本ともなった——頭部、手足、乳房、膝、臍を含めて身体各部が石膏鑄型に型取りされ、男女の生殖器も石膏で型取りされたりしたことについては後述する。調査団長付きの給仕長アルチュール・ポール・ルクレール *Arthur Paul Leclerc* が、船乗り、士官、フエゴ人女性とのあいだにできた親密な関係をかなりあけすけに明かしている。

はじめのうちは家族の仲間としてのみ^{げんそく}舷側に横付けにしていたフエゴ人の女たちが、いまやかなり自発的にやってくる。若い娘たちだけを乗せたカヌーが何艘もよく舷側に横付けしてくる。彼女らはまずまずのかわいらしい顔つきをしていて、わたしたちをまったく拒絶しない。たいそう快く受け入れてくれる。この目的のために彼女らは舷側を始終うろついているからだ。だから出発するまでに何人かの若いフランス人〔が上陸するの〕を見ても驚きはしない。こうして仮小屋がいくつも組み立てられ、船乗りや士官たちが地べたに横になっても、相手にことかかないというわけだ。使い古した衣類を全部フエゴ人に与えてやると、彼らは少しずつ服を着るようになる。なにせ彼らは素っ裸だからだ。もうすでに幾度となく、林が

⁴³ *Ibid.*, p. 115 ; traduction française, *ibid.*, pp. 140–141.

⁴⁴ P. Hyades, «Une année au cap Horn». Ph. Grenier, *Histoires du bout du monde, Une anthologie des récits de voyage en Patagonie*, Bruxelles, Editions Nevicata, 2013, p. 613 より引用。

⁴⁵ L.-F. Martial, I, p. 31.

謎めいた出来事のひそやかな証人となっている。わたしにはこの熱中ぶりがあまり理解できない。実際、彼女らの顔つきは人喰い人種として有名な未開人のわりにはあまり不快ではなくとも、彼女らには清潔さに大いに意を払ってほしいと思わざるをえないからだ⁴⁶。

フランス人たちははるばる「世界の果ての世界」まで来て、一年以上にわたって女性との交情を絶っているわけだから、いかに未開人女性とはいえロマンチックな恋情、もっとあけすけに言えば欲情を抱いたとしても不思議ではない⁴⁷。ましてやイヤードも認める美しく若い先住民女性であればなおさらであろう。その点で示唆的なエピソードを作家ジャン・ラスパリュ Jean Raspail が紹介している⁴⁸。ラスパリュは、調査団長付きの料理人として調査団に参加していた「シャルル・ブーシェ」Charles Bouché という船員の息子から、父親のしたためた雑記帳の類いを受け取った。それには家族への手紙とか短いジャーナリストティックな記述、数篇の詩などが含まれていた。しかし、じつはこの男の名前が調査団員の名簿に見当たらない。代わりにシャルル＝オーギュスト・ビュシェ Charles-Auguste Buché なる船員ならば存在する⁴⁹。おそらくラスパリュがいうブーシェとはこのビュシェのことかと思料されるので、以下ビュシェに同定して論じる。その息子は父親の資料をラスパリュに提供するにあたって「まえがき」をものしているのだが、そのなかにつぎのような箇所がある。「わたし〔ビュシェの息子〕はフエゴ人の写真数葉も所有しています。〔中略〕それらの写真はかなり色褪せています。それらには^{ふんどし}褌だけを身に付けた裸の男女が写っています。その写真の一葉の裏に、ふたりの少女の名前が記載されていて、ひとりハシャオナロン・キパ Chaonalonquipa, 15歳、もうひとりハシャナネス・キパ Chananescuipa, 16歳とあります」。この写真をラスパリュは目の前にしながらこうコメントしている。「小柄で、とがった乳房、中くらいの長さの黒髪をしたそのふたりの少女はかなり美しく、世界の果てにあって夢みがちな船員＝料理人にうっとり〔いささかエロチックな〕夢想に浸らせることが完全に可能だった」とし、この写真がほかでもない、カマナカル・キパ Kamanakar Kipa とその友人シャルアルシュ・キパ Chaoulouch Kipa——彼女らについては後述する——を撮影したものだという⁵⁰。なぜ料理人の手にそのような写真（P. Hyades, VII, planche XII, fig. 2, 3）が渡ったのか。ラスパー

⁴⁶ *Patagonie, op. cit.*, p. 91 より引用 (manuscrit d'Arthur Paul Leclerc)。原文には文法的な破格が散見される。

⁴⁷ 探検家、旅行者、植民地開拓者などが先住民の肉体に抱いたファンタズムについては、瞠目すべき以下の大著を参照。P. Blanchard et alii (dir.), *Sex, race et colonies. La domination des corps du XV^e siècle à nos jours*, Paris, La Découverte, 2018.

⁴⁸ J. Raspail, *Adiós, Tierra del Fuego*, Paris, Albin Michel, 2001, pp. 133–142。これはエッセー風でおもしろいのだが、記述に不正確さがつきまとっているので注意して読まねばならない。

⁴⁹ L.-F. Martial, I, p. VIII.

⁵⁰ この写真について、イヤードは「図版説明」で「同僚の故パイアン海軍大尉がこの写真を撮った」と註釈している。P. Hyades, VII, p. 409.

ユの推測によれば⁵¹、写真撮影担当の士官（おそらく海軍大尉エドモン＝ジョゼフ＝オーギュスタン・パイヤン Edmond-Joseph-Augustin Payen）が何枚も焼き増しして、それらを思い出として団員たちに配布した、いわばピンナップのようなものだった。そのとおりだとすれば、団員たちが現地の未開人女性と情を交わしたり、エロチックな想いを馳せたりしても少しも不思議はないであろう。

ちなみに、ビュシェの息子が綴った「まえがき」は、真偽のほどは不明だが、調査団の蒐集熱の一端を知らせる逸話を伝えている。「ある晩、ふたりのフエゴ人は科学調査団員と酒を飲み過ぎたあまり、陸に戻ることはできませんでした。わたしの父は、ほかの乗組員のメンバーとともに、翌日彼らが溺死しているのを見つけて、彼らを甲板に引き上げ、蒸留酒の樽の中に入れました。わたしが長じてから、トロカデロの人類博物館の左の階にこの眼でしかと彼らの〔標本化された〕死体を見ました」⁵²。

イヤードはどのようにして先住民の標本を蒐集したか

イヤードにとって、先住民が物珍しさから頻繁に訪れるようになったことはもっけのさいわいであった。入れ替わり立ち替わりやってくる先住民の標本が手に入り、石膏模型のコレクションを毎日増やしつづけることができたし、さまざまな人体測定、生理学的な観察、写真コレクションを多様なテーマに拡張させることもできたからである。

そもそもコレクションは当時の人類学においても自然科学においても必要不可欠な重要なものであり、異国を旅行する者たちは研究に結びついた品々をできるだけ蒐集してくることが要求された。18世紀の博物学が自然界に存在する動物や植物などをその性質と分布にしたがって整理・分類する学問であったように、博物学を土台にして発展した19世紀の人類学も、世界中——基本的にはヨーロッパの外部にある野蛮人の住む地域⁵³——に住む人間を皮膚の色、頭髮、骨格、頭蓋骨などの形質的特徴から分類し、この人間の分類から生じる身体的差異がそれぞれの「人種」の精神的・性格的な特徴といかなる関連性を保持しているのか、人類単一起源説 *monogénisme* か

⁵¹ J. Raspail, *op. cit.*, pp. 135–136.

⁵² *Ibid.*, p. 136. また、ビュシェがものした拙い詩篇のひとつに、「この国ではフエゴ人は犬より貪欲で、／わたしたちの逗留中に、難破した捕鯨者が／彼らに捕らえられ喰われてしまった」(*ibid.*, p. 140)とあり、調査団に参加した乗組員のなかにもあいかわらず食人説を盲信している者がいたことを示唆する。

⁵³ 工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説——植民地・共和国・オリエンタリズム』東京大学出版会、2003年、265頁。著者は『19世紀ピエール・ラルース大辞典』の「人種」の項を分析しながら、19世紀は、「地球上には、ヨーロッパ人よりは類人猿に近い野蛮人の住む地域が残されている、そうした野蛮人たちは近い将来に消滅するだろう、と人類学がためらいもなく宣言する時代」と指摘する。

人類多起源説 polygénisme か、などの諸問題解明に取り組んだ⁵⁴。そのためには世界中の人間の標本や生活品、衣装などを「学術的資料」として蒐集・整理する必要があった。つまり19世紀をとおして、旅行家・観測者が材料を蒐集し、人類学者はその蒐集された資料で研究するという役割分担ができていて、それが「科学的」作業の特徴であった⁵⁵。

「多様な人類」の研究、形質人類学は、測定値に基づいて人体を研究する新しい統計学的なアプローチを援用することで19世紀後半に進展した。それが20世紀後半になって、スティーヴン・J・グールド Stephen Jay Gould から人種主義に適用される「人間の測りまちがい」として批判されたことは周知のとおりである⁵⁶。実際、19世紀後半の人類学の重鎮ポール・ブロカ Paul Broca は人類学をこう定義していた。

それゆえ人間が外的構造の観点から考察されるにせよ、解剖学的、生理学的、知的、モラル的、社会的観点から考察されるにせよ、人類を構成する一部のグループのあいだには大きな相違が見られる。さまざまなレベルの特徴の変異が必ずしもいつも同時に進展するわけではないけれど、それでもそれらのあいだにある種の関連性が存在する。かくて、「突顎」 prognathisme と呼ばれるものをなす顔面の傾斜と突出、膚の黒さの度合い、頭髮の縮れ具合、知的・社会的劣等性はよく結びついているし、そのいっぽうで、膚の白さの度合い、まっすぐでつややかな髪、「正顎」 orthognathe の顔立ちが人類系においてもっとも高等な民族のもっとも通常の特徴である⁵⁷。

⁵⁴ このくだりは、弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』山川出版社、2004年、54-63頁に負う。関連して、以下も参照。J. Copans et J. Jamin, *Aux origines de l'anthropologie française*, Paris, Jean-Michel Place, 1994 ; M. Duchet, *Anthropologie et histoire au siècle des Lumières*, Paris, Albin Michel, 1995 (1971) ; C. Blanckaert, «La crise de l'anthropométrie : des arts anthropotechniques aux dérives militantes», in *id.* (dir.), *Les politiques de l'anthropologie. Discours et pratiques en France (1860-1940)*, Paris, L'Harmattan, 2001, pp. 95-172 ; D. Bindman, *Ape to Apollo. Aesthetics and the Idea of Race in the 18th Century*, Ithaca, Cornell U. P., 2002 ; C. R. Paligot, *La république raciale. Paradigme racial et idéologie républicaine (1860-1930)*, Paris, P. U. F., 2006, pp.9-147 ; C. Blanckaert, *De la race à l'évolution. Paul Broca et l'anthropologie française (1850-1900)*, Paris, L'Harmattan, 2009 ; C.-O. Doron, *L'homme altéré. Races et dégénérescence (XVII^e-XIX^e siècles)*, Ceyzérieu, Champ Vallon, 2016, pp. 417-530 ; 竹沢尚一郎『表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学』世界思想社、2001年。

⁵⁵ たとえば、こうした先住民の骨格や遺骨、頭蓋骨を持ち帰ったイタリア人ジャコモ・ボヴェ Giacomo Bove については、A. Marangoni et alii, «Tierra del Fuego, its ancient inhabitants, and the collections of skeletal remains in the Museums of Anthropology of Florence and Rome», *Museologia scientifica*, nuova serie 5(1-2), 2011, pp. 88-96 を参照。

⁵⁶ S. J. Gould, *La mal-mesure de l'homme*, trad. J. Chabert et M. Blanc, Paris, Odile Jacob, 2009 (nouv. éd.). グールド『人間の測りまちがい——差別の科学史』上・下、鈴木善次・森脇靖子訳、河出文庫、2008年。

⁵⁷ P. Broca, Article «Anthropologie» (1866), in *id.*, *Mémoires d'anthropologie*, Paris, Jean-Michel Place, 1989, pp. 7-8.

骨格や生体の寸法を測定することで人体を数量化するわけだが、人体測定ということでは写真と石膏模型も人類学の重要な領野となった。石膏模型を作製しておけば、生体とは違い、人体に客観的かつ簡便に、また継続的にアクセスできる。フランスでは、顔面の石膏取りが写真と同じ時期に形質人類学に導入されたという⁵⁸。ジュール・デュモン・デュルヴィル Jules Dumont d'Urville が世界を周航したときに（1837-40年）、同行していた骨相学者アレクサンドル・ピエール・マリー・デュムーチエ Alexandre Pierre Marie Dumoutier は太平洋で52点の胸像を国立パリ自然誌博物館のために作製して持ち帰った⁵⁹。そのコレクションは概ね熱狂的に迎えられたことを当時の会議報告が伝えている。「デュムーチエ氏が持ち帰ったオセアニア人のコレクションのおかげで人類学は新しい道を歩むことになる。〔中略〕というのは、こうした民族を探し求めに行かずとも——第一、そんなことはひとりだけではとてもできないことだ——、民族のほうからいくつかの点で観察者、哲学者、歴史家、生理学者を迎えに来ることになるのだから」⁶⁰。

だからこそ、パリ地理学協会 Société de géographie de Paris が刊行した『旅行家たちへの手引』 *Instructions générales aux voyageurs*（1875年）のなかで「人類学」の章を執筆しているアルマン・ド・カトルファージュは、「コレクションはほかの自然科学と同じくらい人類学にとって重要である。旅行者たちは研究の領域に結びついた事物をできるだけ蒐集することに専念しなければならない。というのも現状では、それらの事物を収納するのを目的とした大部分の蒐集室で、真に価値を有しているものはほぼ無に等しいからだ」⁶¹、と述べてコレクションを増やす重要性を強調したうえで、もっとも手軽に搬送できるものとして髪と髭の標本をまず挙げ、出所の確実な頭骨はあらゆる機会を利用して蒐集し、もしも事情が許せば骨格か、少なくとも骨盤も加えるこ

⁵⁸ このくだりは、F. Sysling, «Faces from the Netherlands Indies Plaster casts and the making of race in the early twentieth century», *Revue d'histoire des sciences humaines*, n° 27 : *Anthropologie et matérialités de la race*, 2015, p. 92 に負う。

⁵⁹ E.-T. Hamy, «La collection anthropologique du Muséum National d'Histoire Naturelle», *L'Anthropologie*, t. XVIII, 1907, p. 267. ほかに、以下も参照。E. H. Ackerknecht, «P. M. A. Dumoutier et la collection phrénologique du Musée de l'Homme», *Bulletins et Mémoires de la Société d'anthropologie de Paris*, X^e Série, t. 7, 1956, pp. 289-308; M. Renneville, «Un terrain phrénologique dans le grand océan (autour du voyage de Dumoutier sur *L'Astrolabe* en 1837-1840)», in C. Blanckaert (dir.), *Le terrain des sciences humaines. Instructions et Enquêtes (XVIII^e-XX^e siècle)*, op. cit., pp. 89-138.

⁶⁰ M. Renneville, *Le langage des crânes. Une histoire de la phrénologie*, Paris, Sanofi-Synthelabo, 2000, p. 26 から引用。

⁶¹ A. de Quatrefages, «Anthropologie», in Société de Géographie, *Instructions générales aux voyageurs*, Ch. Delagrave, 1875, p. 257. 同じ著者が1867年のパリ万国博を機会にまとめた以下の著書で、19世紀後半における人類学の状況を窺い知ることができる。Id., *Rapport sur les progrès de l'anthropologie*, Paris, Imprimerie impériale, 1867. 「コレクション」については、*ibid.*, pp. 63-69 を参照のこと。

とを旅行家に勧めるのである。ついで、人類学的な写真のコレクションに言及する⁶²。

じょうずに撮れた写真は大きい価値がある。そのためには正面からと横顔が正確無比に撮影されなければならない。できるだけ同一人物がこの二つの格好で撮影されるべきで、大きさが変わらないように被写体と写真機との距離を一定に保つことに心がけねばならない。どちらかを選ばなければならないときは、頭部だけを撮影するなら正面より横顔が、身体全体を撮るなら横顔より正面がよいだろう⁶³。

写真と同様に重要なのは石膏模型である。あらかじめ用意して鋳型をとってこることが勧奨されている。顔面だけでもよいし、頭部全体でも上半身でも四肢でもよく、少なくとも手か足の石膏鋳型を搬送すべきであり、その場で目の前にいるモデルを見ながら石膏模型に彩色することができればもっと上乘だという。彩色までできないときは、色の指示を石膏模型にじかに書き込んでもよいと助言する。さらには、身体各所から取った10センチから12センチ四方の皮膚の断片をアルコール漬けにしてくれば、有色人種の研究に大いに裨益するところがあるという。いずれにせよ、蒐集品にはただちにラベルを貼っておくことが大切だと結んでいる⁶⁴。

ところで、カトルファージュの記述で注目しなければならないのは、身体的・生理学的特徴の記録にもまして知的特徴を重要視し、言語や家族構成、女の役割、子どもと親の関係などに注意を向けるよう勧めていることである⁶⁵。こうした知的特徴や心的特徴の重視は、後述する自然誌博物館作成の手引にも、プロカによる手引にも欠落している観念なのである。しかも、現地の観察者は文化を相対的に把握する姿勢を示さなければならないと力説される。「道徳観念はどんな人間にも存在するが、しかしその表し方は異なる。外国人、なかんずく未開人の研究において、ヨーロッパ人は変なふうに見たり誤った判断を抱いたりしないように、自分の受けてきた教育や自分自身の感情を往々忘れなければならない」⁶⁶。ティエラ・デル・フエゴでのイヤードの観察

⁶² N. Dias, «Photographier et mesurer: les portraits anthropologiques», *Romantisme*, n° 84, 1994, pp. 27–49 を参照。ほかに、以下も参照。E. Edwards (ed.), *Anthropology and Photography 1860–1920*, New Haven, Yale U. P., 1992 ; *id.*, *Raw Histories. Photographs, Anthropology and Museums*, Oxford, Berg, 2001 ; L. Daston et P. Galison, *Objectivité*, traduit par S. Renaut et H. Quiniou, s.l., Les presses du réel, 2012, chap. III ; P.-J. Jehel, *Photographie et anthropologie en France au XVI^e siècle*, Mémoire de DEA, Université Paris VIII, 1994–1995 ; O. Loiseaux (dir.), *Les premiers voyageurs photographes, 1850–1914*, Paris / Grenoble, Bibliothèque nationale de France / Glénat, 2018.

⁶³ A. de Quatrefages, «Anthropologie», in Société de Géographie, *Instructions générales aux voyageurs*, *op. cit.*, p. 258.

⁶⁴ *Ibid.*

⁶⁵ *Ibid.*, pp. 253–254.

⁶⁶ *Ibid.*, p. 254.

報告は、カトルファージュの教えに則って先入見を排した人類学的・民族誌学的な記録といえるかもしれない。だからこそ、イヤードは『報告書』第7巻の「緒言」で、「この著作はわたしたちのオリジナルな研究報告であり、なんら先入見もなく当地でおこなわれた観察報告である」⁶⁷と宣言することができたのである。

このように蒐集品は、博物館に収納する意味でも、異国に簡単にフィールドワークすることもできない人類学者にとっても貴重なことこのうえないのである。自然誌博物館がまとめた『自然誌の品々を蒐集・保存・搬送する方法について、旅行家と植民地職員のための手引』*Instructions pour les voyageurs et les employés dans les colonies sur la manière de recueillir, de conserver et d'envoyer les objets d'Histoire naturelle* (1860年、第5版)でも、まず実物から取られた、できれば生身の人間から取られた石膏模型を蒐集することが推奨されている。一般的には頭部か胸部の石膏模型でよいとされるが、しかしこと身体各所のプロポーションとか身長的高低とか筋肉の過度の発達ないし縮小とかで注目すべき人種にかざれば、身体全体の石膏模型がまったき重要性をもつ。筋肉に関する場合は、四肢が別個に型取りされれば有用だ、と⁶⁸。ついで推奨されるのが写真撮影であった。石膏模型がなければ、できるだけたくさん写真を蒐集しなければならない。立ち姿のモデルの正面と横顔の肖像写真を撮るのである。そのとき斜めに撮られた肖像写真は価値がないとにべもない。やはりできるだけその場で、つまりモデルの前で、石膏模型も写真も彩色しなければならないとされる。石膏模型であろうが写真であろうが、人種特有の特徴が最高度に現れている被写体を選ぶように腐心しなければならない。この点からすると、今日まであまりに蔑ろにされてきた女や子どもに注意を払うよう旅行家に喚起し、さらには原始的な手仕事を知らぬのにふさわしい道具や武器、布地などを蒐集してくる有効性を説いて結ぶ。注目されるのは、博物館所蔵に必要とされるべきもっとも興味深いもののひとつに、膚の色はますます明るく、灰色か青い眼をした南米の先住民が挙げられていることである⁶⁹。

最後に、イヤードも必ずや読んでいたはずのポール・ブロカの『人類学研究ならびに人類学的観察のための手引』*Instructions générales pour les recherches et observations anthropologiques* (1865年)はコレクションについてどのように述べているのか。19世紀最大の解剖学者にして人類学者のはつけから、「〔人類学的〕コレクションは鋳型、写真かデッサン、人体の断片（頭蓋骨、骸骨、脳、髪など）からなる」⁷⁰と定義づけ、石膏の型取りについて、「もっとも重要な人体

⁶⁷ P. Hyades, VII, p. VI.

⁶⁸ *Instructions pour les voyageurs et les employés dans les colonies sur la manière de recueillir, de conserver et d'envoyer les objets d'Histoire naturelle*, Paris, Imprimerie de L. Martinet, 1860 (5^e éd.), chap. I, «Anthropologie ou Histoire naturelle de l'homme», p. 13.

⁶⁹ *Ibid.*, pp. 13–15.

⁷⁰ P. Broca, *Instructions générales pour les recherches et observations anthropologiques*, Paris, Victor Masson et fils, 1865, chap. I, «Des collections anthropologiques», p. 5.

部分は頭部と手と足である」⁷¹とする。それぞれの石膏模型には、(1) 対象者の名前、性別、年齢、地方ないし国、居住地と生誕地、(2) 色彩一覧表（瞳孔に20種類の色彩、膚と髪に32種類の色彩を規定し、それぞれに番号を付したもの）に基づいて膚の色の指示を添付しなければならない。いずれにせよ、(3) 頭部の石膏模型には毛髪の見本を付着させるのがよい。先住民を生身から石膏の型取りをするには技術が必要だが、死体の頭部を型取りするのは旅行家でもできるだろうから、機会があれば間違いなく型取りするように勧告している。写真については、(1) 被り物をしていない頭部で、きっちりと正面からと横顔から撮られなければならない、それ以外から撮ったものはなんら有用でないとまで断じる。(2) 立ち姿の肖像で撮影されるべきで、立った被写体はできるだけ裸で、両腕は身体の両脇に垂らしたまま正面から撮影されなければならない。そして写真には、石膏模型のときと同様に、色彩一覧表（本書巻末に付されてある）にしたがって膚、眼、髪、髭、眉毛の色を表す番号を付与することが必須とされ、本来の大きさがわかる表示を付すことが求められる⁷²。後者の表示については、1881年になってギュスターヴ・ル・ボン Gustave Le Bon がパリ順化園で展示されたフエゴ人の写真を撮ったことをパリ人類学協会で報告するなかで、「長さ1デシメートル[10センチ]の紙テープでできた目盛り」⁷³を被写体の腕に付けることで、人体のすべての部位の寸法を写真の上で測ることができると評価し、よい写真というものは生身の人間を測定するのと同じ測定効果が上げられる目盛りのついた写真のことだと指摘している——もともと、パリ人類学協会事務局長ポール・トピナール Paul Topinard は、所詮写真が人のところが作りだした「人間の類型」という幻像を映したものでしかないとして表面上の客観性に異議申し立てをすることで、写真による人体測定法はすぐれた人体測定法に取って代わるものではないと反論している⁷⁴。そして蒐集すべきものの三つめとして挙げられた「人体の断片」としては、頭蓋骨、骨格、骨盤、脳、皮膚の切片、髭の、とりわけ毛髪のサンプル、ミイラ化した頭部、とづく⁷⁵。

こうした要覧、手引 *vade mecum*⁷⁶をもとに、イヤード——人類学研究で写真の使用に積極的だったカトルファージュとは知己を得ていたことも想起しておこう——は石膏鋳型を作製し、写

⁷¹ *Ibid.*, p. 6.

⁷² *Ibid.*

⁷³ G. Le Bon, «Sur les applications de la photographie à l'anthropologie à propos de la photographie des Fuégiens du Jardin d'acclimatation», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. IV, 1881, p. 758.

⁷⁴ *Ibid.*, p. 760. トピナールのプロカへの反論については、C. Blanckaert, *op. cit.*, pp. 190–194 を参照。

⁷⁵ P. Broca, *op. cit.*, pp. 7–19. プロカの手引については、C. Blanckaert, *op. cit.*, pp. 177–190 を参照。

⁷⁶ 前出のカトルファージュによれば、この手引 *instructions générales* が人体測定表の見本を収め、眼球の虹彩と膚のナンバーリングされた色彩表の多色刷石版図版を添えて、明晰に書かれていれば、旅行者のほうは明瞭かつ比較可能な観察を集めるのに必要な条件を整えることができる。しかもこうした手引は増刷されて、広く世に流布したらしい。A. de Quatrefages, *Rapport sur les progrès de l'anthropologie*, *op. cit.*, p. 50, n. 2.

真を撮影させたに相違なく、そうした成果は『報告書』第7巻に収録されている——たとえば詳細な人体測定一覧表 (Tableau III-V) と多くの巻末写真。同僚のフェルナン・ドリールに宛てた書簡 (1883年4月24日付) で、イヤードは興奮気味に書いている——この書簡の主要部分は『パリ人類学協会会報』*Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris* (1883年) に掲載された。

わたしはもう76件の所見を得ました。科学調査団の許に姿を見せたすべての家族についてはいまのところ完璧なのだけれど、この一連の所見は終わりそうにありません。というのも、ここにほんの短いあいだだけ姿を現したかなり多くの先住民は再び訪れてくれるだろうと、ほぼ確信しているからです。さまざまな人類学的研究がオレンジ湾の未開先住民に周知のところとなれば、そのときは彼らも徹底的な検査をそれほど「嫌がって」逃げ回ることがなくなるでしょう。フエゴ人は測定、写真、石膏鋳型を意味する新語を作ったのですが、それはいまや興味あるわれらが隣人たちのことばで共通語になっているのです⁷⁷。

書簡はつづけて、先住民たちは申し分のないモデルとしてポーズをとってくれたし——「〔そのことは〕カトルファージュ氏に送った写真で判断できようというものです」⁷⁸という異文が存在する——、2歳の子どもを測定したときにはその母親が手伝ってくれたおかげでつつがなく終わることができたし、頭部の石膏取りに失敗したときは被験者が微笑みながらも一度石膏取りをしようと申し出てくれて、満足のいく頭部の石膏鋳型を4点完成することができたと伝えている。そして先住民を対象にした人体の石膏取りについて、こうも記す。

男にも女にも恥を忍んでもらうことで、彼らの外部の生殖器官のみごとな石膏鋳型を難なく手に入れました。四肢と手足の多数の石膏鋳型についてはいうまでもありません……⁷⁹。

上掲の引用に、ほぼ同じ文面の書簡を掲載した『民族誌学評論』*Revue d'Ethnographie* 第2巻 (1883年) では以下のようなセンテンスが追加されている——この異文の存在は、『パリ人類学協会会報』には会議の席上で読み上げられた書簡の主要部分が掲載されたところによるものだろう。

それら石膏鋳型のいくつかに不備とか欠陥とかがあっても、それはまずけっしてモデルのせ

⁷⁷ P. Hyades, «Observations sur les Fuégiens», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VI, 1883, p. 617.

⁷⁸ P. Hyades, «Observations anthropologiques et ethnographiques à la baie Orange», *Revue d'Ethnographie*, t. II, 1883, p. 564. ちなみに、世界の果てに逗留するイヤードはカトルファージュと連絡を欠かさなかったことが、この一文からも推測できる。

⁷⁹ P. Hyades, «Observations sur les Fuégiens», *cit.*, p. 618.

いではありません。運んできておいた200キロの石膏はほとんど無駄なく使い切りました。このまへの郵便でお願いした新たな調達を受け取れば、被験者全員を首尾よく石膏型取りするができると思います⁸⁰。

石膏鑄型の作製法は、おおよそつぎのようだった。ひとり分あたり、顔の鑄型を作るには石膏が半キロほど必要で、それを水または湯と混ぜて滑らかになるまでかき混ぜる。被験者はふつう横になり、頸が当たる部分に半円の切り込みを入れた箱のようなもののなかに頭部を置く。石膏を剥がすときの、皮膚に焼けるような痛さを防ぐために、顔とか手とか毛髪とかにオイルをすり込んでおく。呼吸をしやすくするために、石膏がかぶらないよう鼻孔を空けておかなければならない——ガチョウの尾羽を鼻孔に差し込むこともあったようだ。石膏の凝固を早めるためにたっぷり塩分を含ませた石膏を顔に塗るとき、石膏が毛髪に滴り落ちないように留意しなければならない。石膏を剥がすときがもっともむずかしく、慎重にゆっくりと取り除かねばならない⁸¹。

実際、先住民から協力が取り付けられるだろうというイヤードの楽観的な見通しがほとんどそのとおりになったことは、およそ一年間にわたるティエラ・デル・フエゴ逗留であげた人類学的な成果が大きかったことから窺われる。調査団長マルティアルはそのことを得々として語っているからだ。

わたしたちは豊富な人類学的収獲物を積んで帰国した。それらが踏査も稀な地からもたらされたこと自体、すでにそれらの価値を表している。イヤード氏とアーン氏〔同じ調査団の医師〕が、全員の協力を得ながら、この比較的貧相な地方で蒐集した地質学、鉱物学、植物学、動物学の標本を収めた箱を持ち帰ったが、その数170箱はくだらない。加えて、南氷洋の鯨のほぼ完全な骨格二体も特筆に値しよう。

このコレクションでは人類学も民族誌も大きな比重を占めている。道具一式を備えたカヌー2艘、完全な状態の小屋、フエゴ人が使用しているあらゆる道具、武器などを持っているのだ⁸²。

⁸⁰ P. Hyades, «Observations anthropologiques et ethnographiques à la baie Orange», *cit.*, p. 564. イヤードの書簡がパリ人類学協会の席上で読み上げられるときに、会員であるカトルファージュの名前を省くのは自然なことであろう。書簡の後段にはカトルファージュへの謝辞がしたためられているが、それも読み上げのときにみごとに省かれている。

⁸¹ F. Sysling, «Faces from the Netherlands Indies Plaster casts», *cit.*, p.97; E.-T. Hamy, «La collection anthropologique du Muséum National d'Histoire Naturelle», *cit.*, pp. 267-268. アミーはデュムーチエが使用した生身の人間からの型取り法を喚起しているが、ドリールによればイヤードはまさにこの技法を適用したらしい。Ph. Revol, «Observations sur les Fuégiens : du Jardin d'acclimatation à la Terre de Feu 1881-1891», *cit.*, p. 264, n. 1.

⁸² L.-F. Martial, «Rapport sur l'expédition française du cap Horn», *cit.*, p. 4.

調査団が持ち帰った人類学コレクションは「218点にのぼり、骨格、頭骨、石膏模型、毛髪のサンプルなど」⁸³を含んでいた。そのうち、あらゆる年齢層のフエゴ人男女のいろいろな身体部位の石膏模型100点ほどがフランス人類学協会のブロカ博物館に寄贈された⁸⁴。

このコレクションは1884年の初め頃に展覧会で展示され、素人の一般大衆は心ゆくまでじっくり観ることができた。展示物として、「生身の人間から採取した、頭部、手足、乳房、膝、臍の石膏型取り、毛髪の標本、写真、〔中略〕オレンジ湾に住むフエゴ人の住居、〔中略〕2艘のカヌー、アザラシやカワウソやグアナコの皮——フエゴ人は紐でそれを肩にかけてマント代わりに使う——、女や少女の生殖器を保護するのに用いられる三角形の皮、貝殻や鳥の骨で作った首飾り、革紐で作られたブレスレット、〔中略〕籐製の籠、樹皮でできた茶碗や手桶、鴨の骨でできたきり錐、貝殻で作ったナイフとかのみ鑿、鯨の骨で作られたくさび楔、〔中略〕鯨の腱あるいは海藻の茎を組紐にして作られた釣り糸、〔中略〕2本の細紐が取り付けられた革製の菱形をした投石器、弓および瓶のガラスで作られたとがった先を持つ矢、〔中略〕そして最後に、ブナ材でできた柄のついた骨でできた銚」⁸⁵などが見られたはずだ。しかし大衆の目に触れないように秘匿されたものもあった。

〔1884年の展覧会にこれらの石膏模型が展示されたが〕当然ながら一般人には公開されなかった1階のケース箱のなかに、イヤード博士はフエゴ人男性およびフエゴ人女性の性を、生身の人間からみごとに型取りされた一連の石膏模型が収められていた。人類学研究においてこの側面の問題は今日までうやむやにされていたが、しかしながら異なった人種の生殖器の形態構造からおそらく得られる情報がいくつかあるであろう⁸⁶。

この豊富な人類学上の資料体を蒐集するために、イヤードがおこなう人体測定へのヤマナ族の好奇心や、測定させたらお礼に与えるプレゼントを利用することで、イヤードは人体の全箇所の石膏模型をたくさん作製できたのである。実際イヤードも書くとおりの、「たいして苦勞もせずに、自然誌的な標本のためとかサンプルの蒐集のために、〔フエゴ人の新奇なものに対する強い認識を〕相当な助けとすることができた。そのための第一条件は、わたしたちに役立ってくれるべく

⁸³ *Matériaux pour l'histoire primitive et naturelle de l'homme*, vol. 20, 1886, p. 212.

⁸⁴ «Dons au Musée Broca», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VIII, 1885, pp. 648–649. N. Dias, «Séries de crânes et armée de squelettes : les collections anthropologiques en France dans la seconde moitié du XIX^e siècle», *Bulletins et Mémoires de la Société d'anthropologie de Paris*, Nouvelle série. t. I, 1989, pp. 219–222 も参照。

⁸⁵ G. de Mortillet, «Expositions des collections de l'Expédition du cap Horn», *L'Homme*, 1884. A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p. 92 より引用。

⁸⁶ A. T. Mondière, «Note sur quelques moulages d'organes génitaux des deux sexes pris par le Dr Hyades sur des Fuégiens», *L'Homme*, n^o 25, 1885. A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p. 92 より引用。

彼らにたっぷり食べさせてやるだけの十分な食糧をもつことだった」⁸⁷。

ここでも先述したルーカス・ブリッジズの証言がイヤードの石膏取りのありようを教えてくれる。調査団員たちはあらゆるもの——植物、岩石、鳥の卵、昆虫、蝶、蛾など——のサンプルを入手したがっていた。ルーカスら子どもたちにアルコール瓶を渡して、虫、幼虫、スカラベ、蜘蛛を採集するように頼んだり、獵銃を渡してたくさんの鳥の標本を作らせたりした。子どもたちはフランス人科学者たちのことばの問題にも対処した。フランス人に英語が話せる人はいたが、ヤマナ族のことばを話せる者はひとりもいなかったのも、先住民が理解させようとする事柄を代わりに彼らに翻訳してやることで、フランス人と先住民の仲介役を果たすこともあった。他方、父親トマス・ブリッジズも科学者たちのために一肌脱ぐことがあった。トマスの仲介がなければ、フランス人は先住民の石膏取りはできなかつただろうと息子ルーカスは言う。トマスがまえもって先住民に大丈夫だからと安心させておかなければ、先住民はけっして石膏鑄型をとらせることはなかつただろう。トマスの説得で、先住民は窒息しそうな分厚い石膏を塗ることに同意したというのである。先住民のひとり、呼吸ができるよう鼻孔に尾羽を差し入れられて、顔全体が石膏に覆われて見えなくなっているあいだ、ずっと自分の手をつかんで離さなかつた、とはトマスの言である⁸⁸。

イヤードの仕事に積極的に協力した先住民もいたらしい。「アトリナタ *Athlinata* というフエゴ男性は、足の石膏鑄型を取るためにほぼ4時間のあいだ、完全にじっと我慢してくれただけのおかげで、石膏さえ損傷していなかったら〔コレクションの保存にはひどい湿気が大敵だったから〕完璧にうまくいったのだが」⁸⁹、とイヤードが書くほどである。このアトリナタというヤマナ族男性は「オレンジ湾でもっとも賢い先住民のひとり」⁹⁰で、イヤードお気に入りの男性モデルとして、鉈を投げるポーズをとった写真 (*P. Hyades, VII, planche I*) や足から身体全体にわたる石膏模型のモデルとなった。彼はモデルになってくれただけでなく、民族誌的な関心をもつイヤードを鉈の柄をみずから制作する工程に立ち会わせてもいる⁹¹。

イヤードは医師として先住民の治療（創傷、関節炎、膿瘍、^{ほうそうしきえん}蜂巣織炎〔フレグモーネ〕など）に当たったばかりでなく、当然死体にも関心を寄せ、熱心に死体を蒐集、フランスに搬送しようとしている。流産の末の出血で死んだ30歳くらいのフエゴ人女性の遺体をその夫から買い受け、1883年2月8日に墓を掘り返して、死後4、5日経ったその死体を解剖し、ただちに骨格標本を作

⁸⁷ P. Hyades, VII, p. 250.

⁸⁸ E. L. Bridges, *op. cit.*, pp. 114–115: traduction française, *op. cit.*, p. 140.

⁸⁹ A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p. 94.

⁹⁰ P. Hyades, VII, pp. 405–406.

⁹¹ *Ibid.*, pp. 354–355; *id.*, «La chasse et la pêche chez les Fuégiens de l'archipel du cap Horn», *Revue d'Ethnographie*, t. IV, 1885, pp. 538–539. ここでは、アトリナタを「賢くて粗野な」«aussi intelligent que sauvage» (*ibid.*, p. 538) と形容している。

製した。前述したドリール宛ての手紙で「まだ骨格は一体しかないが、本当にみごとなものなんです。〔中略〕掘り出した女の内臓はほとんどすべて保存しましたが、脳は腐敗していました」⁹²と書かれている標本がそれである。イヤードはほかにも右脚に壊疽を生じて死んだフエゴ人男性の遺体を大樽に満たしたアルコール液に浸して、保存状態のよいままにそれをフランスに搬出した⁹³。カトルファージュの助言もあって、パリ搬送後のその遺体は死体解剖に先立って全身の石膏鑄型が作製され、その後に筋肉系の研究対象とされた⁹⁴。「こうして生身の人間および骨格から測定値を計測し、比較することができるのはおそらくはじめてのことである」⁹⁵。この骨格二体の写真はイヤードの『報告書』第7巻巻末 (P. Hyades, VII, planche XXVIII) にも収録されている。あるいは、1883年11月にフランス科学調査団がロマンシュ号で帰国する際にウシュアイアに立ち寄り、イギリス国教会伝道所の許可を得て墓を掘り返して、死亡したばかりのフエゴ人の男児（8歳から10歳の）の遺体をアルコール漬けにしてフランスに持ち帰っている。その検死結果をイヤードは『報告書』に全文転載している⁹⁶。ちなみに先述した、木片が脛骨あたりに突き刺さったのがもとで壊疽を起こし、そのために死亡したと診断された35歳の男に関連して、イヤードは、木片が突き刺さる原因はフエゴ人が素裸でゴミの中で寝るという根強い習慣にあると指摘した。この習慣のせいで、診断した女性において膣の奥や子宮頸部にも藺草の破片があるのを膣鏡で何度も見たとも記述している。彼女らの寝ているあいだに藺草が知らぬ間に入り込んだ、というのがイヤードの見解である⁹⁷。

イヤードが、こうした蒐集が科学の進歩、「高尚な人類学の進歩」⁹⁸に大いに資すると考えていたのは間違いない。「〔写真や石膏型取りなどの〕すべてのこうした資料体は、科学調査団のコレクションに含まれる民族誌的な標本とか、完全にそろった骨格とか、アルコール漬けで保存された無傷の死体と同様に、近いうちに深められた研究の対象になることだろう」⁹⁹、と明るい見通しを立てているからである。

しかしイヤードのこうした意図にもかかわらず、ティエラ・デル・フエゴに4回にわたって滞在し（1918年12月-1919年3月、1919年12月-1920年2月、1921年12月-1922年3月、1923年-1924

⁹² P. Hyades, «Observations anthropologiques et ethnographiques à la baie Orange», *cit.*, pp. 564, 565.

⁹³ *Ibid.*, p. 566; P. Hyades, VII, p. 25; cf. A. Chapman, *op. cit.*, pp. 523-524, p. 674, n. 30, p. 675, n. 38.

⁹⁴ P. Hyades, VII, pp. 25, 61.

⁹⁵ *Ibid.*, p. 26.

⁹⁶ *Ibid.*, pp. 230-232.

⁹⁷ *Ibid.*, pp. 224-226.

⁹⁸ C. Blanckaert, *De la race à l'évolution*, *op. cit.*, p. 174 より引用。

⁹⁹ P. Hyades, «Rapport sommaire sur les recherches d'Histoire naturelle faites par la Mission du cap Horn», in Académie des sciences, *Mission scientifique du cap Horn. 1882-1883. Rapports préliminaires*, *op. cit.*, p. 40.

年)、フエゴ人と生活をともにしたドイツ人の人類学者マルティン・グシンデ Martin Gusinde¹⁰⁰によれば、40数年経った後でも、イヤードのこの作業を許しがたい侮辱行為とみなすヤマナ族の人びとがいて、彼らの怒りはなお鎮まっていなかった。「ある年代の〔ヤマナ族の〕人びとは数人の若い娘の生殖器に石膏の鋳型が取られたことにとりわけ憤慨を示していた。同時に、この調査団の何人かの補助要員の振る舞いもまた、何度も先住民の眉をひそませた」¹⁰¹。この最後の一文は、その意味内容を審らかにしないが、たぶん調査団のメンバーがヤマナ族の少女たちに性的関係を求めたか、卑猥な冷やかしをしたことをほめかしているのだろう。

こうしてイヤードの作業は、オレンジ湾に先住民が逗留地として家族ぐるみで寝泊まりするという好条件のおかげで、意想外に進捗した。とはいえイヤードは、同行したパリ自然誌博物館助手レオン＝エルネスト・ソーヴィネ Léon-Ernest Sauvinet の助けを借りながら蒐集と整理に着手したコレクションにはつねに意を注ぎ、現地の「はなはだしい湿気のせいで蒐集物の保存のためにうんざりするくらい注意を払わねばならない」¹⁰²と嘆いてみせてもいるのだった。

写真撮影については、イヤードみずからが人体測定をおこない、かつ石膏鋳型を作製したヤマナ族を、写真撮影担当の海軍大尉エドモン・パイヤンに撮影させた。パイヤンが「予備報告」(1884年)で言及しているとおりである。「〔人類学と自然誌に関する写真撮影について〕わたしは被写体の選択についてはイヤード博士の指示どおりに従って、彼が人体測定し石膏鋳型を作製したフエゴ人をわたしは好んで撮影した」¹⁰³。イヤードの指示どおりにパイヤンが撮影した写真を見ると、イヤードが前述のプロカによる手引をよく知っていたことが推量されよう——ただし後述するように、パイヤンが若い女性たちを撮った写真はプロカの勧めからほど遠くあまり科学的とはいえない。マルティアルの『報告書』第1巻(1888年)は全323葉の写真リスト¹⁰⁴を掲載しているが、それによるとパイヤンは151葉、残る172葉は副団長ジャン＝ルイ・ドーズ Jean-Louis Doze が撮影した。そしてイヤードはプロカの色彩一覧表に依拠しながら、膚、眼、頭髮の色をメモしておき、パリに帰ってから石膏模型に彩色をおこなったのである。

イヤードの手紙によれば、ヤマナ族はイヤードとパイヤンが指示する写真撮影にまもなく慣れたようで、「彼ら〔ヤマナ族〕は写真のことを、Toumayacha alakanaと呼んでいます。これは、被り物で頭を覆って見る、という意味です。〔中略〕彼らはみごとなモデルとしてポーズをとる

¹⁰⁰ グシンデがこの間に撮影した1200葉の写真の一部を、M. Gusinde, *L'Esprit des hommes de la Terre de Feu. Selk'nam, Yamana, Kawésqar*, ouvrage dirigé par C. Barthe et X. Barral, Paris, Editions Xavier Barral, 2015 で参看することができる。

¹⁰¹ A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p. 46.

¹⁰² P. Hyades, «Observations anthropologiques et ethnographiques à la baie Orange», *cit.*, p. 566.

¹⁰³ E. Payen, «Magnétisme terrestre. Enregistreurs. Photographie», in Académie des sciences, *Mission scientifique du cap Horn. 1882–1883. Rapports préliminaires*, *op. cit.*, p. 17.

¹⁰⁴ L.-F. Martial, I, pp. 473–479. イヤードは287枚のネガを自然誌博物館の人類学研究所に寄贈し、それらは現在、人類博物館の写真資料室に保管されてある。

ようになりました〔後略〕」¹⁰⁵。実際、写真撮影のときにフエゴ人は指示どおりにポーズをとってくれた、と「ホーン岬の一年」で回想している。

写真は無生物だけでなく周囲にいる生き物、風景や先住民も被写体とした。しかし大部分は先住民に割いて、後日にフエゴ人の類型研究を深めることができるように備えた。わたしたちの近隣で生活していた先住民たちはこうしてつぎつぎとほぼ全員が写真を撮られていき、単独であろうが集団であろうが——後者の組み合わせは若い子どもたちにとくに適用された——、みんなはポーズをとるよう要求されても喜んで応じてくれた。よく思ったものだ、ヨーロッパの子どもたちなら写真機のまえでじっとしていられないものを、フエゴの子どもたちはわたしたちに少し慣れ親しむと苦もなくじっとしていられるのに、と¹⁰⁶。

写真術の発明当初は写真撮影に長い露光時間を要したため、長時間にわたって静止したままポーズをとらねばならなかったが、それでもフエゴ人たちが従順にポーズをとってくれたのはポーズの時間を短縮する写真技術の進歩にあったと看破したのはパイヤンである。〔写真の感光乳剤として用いる〕臭化銀のゼラチン溶液のこのうえない感光度のおかげで、ポーズをとる時間を最小限に短縮することで、数秒間なんとか不動のままでいられた先住民の写真を撮ることができた」¹⁰⁷。

イヤードは帰国後の「予備報告」（1884年）でも、「良好な写真が数多のフエゴ人から撮れて、それらのおかげで身体的全箇所の多数からなる石膏型取りとともに、ホーン岬のフエゴ人の類型をパリで研究することが可能になるだろう。写真についても石膏型取りについても、先住民はポーズを要求しなくてもすんなり従ってくれたことは特記しなくてはならない」¹⁰⁸、と記している。しかしこのことばをそのまま鵜呑みにすることはむずかしいものがあるだろう。とりわけはじめのうちは、写真機を見たこともない先住民は撮影されることに大いに警戒し、怖がったはずである。後年、金鉱探索のためにイスラ・グランデの地を踏んで、セルクナム族などの先住民を殺戮したルーマニア人ジュリウス（フリオ）・ポペル Julius (Julio) Popper は、野営するセルクナム族の人びとと遭遇し、写真を撮ろうとしたときの「不快きあまり裸の状態、怖じ気をふるう外観の、75歳はくだらぬ老女」のパニックぶりを語っているからである。

¹⁰⁵ P. Hyades, «Observations anthropologiques et ethnographiques à la baie Orange», *cit.*, p. 564.

¹⁰⁶ P. Hyades, «Une année au cap Horn», p. 400. Ph. Grenier, *Histoires du bout du monde*, *op. cit.*, p. 626 より引用。

¹⁰⁷ E. Payen, «Magnétisme terrestre. Enregistreurs. Photographie», *cit.*, p. 17.

¹⁰⁸ P. Hyades, «Rapport sommaire sur les recherches d'Histoire naturelle faites par la Mission du cap Horn», *cit.*, pp. 39–40.

この奇妙な人間標本を写真に撮ることにうまく成功しなかった。わたしが写真機を準備し、焦点を合わせるために黒い布で頭を覆うと、女は自分の命が危ないと思ひ込み、筆舌に尽くしがたい恐怖を表したのだ。女はぎょっとするほど興奮した身ぶりをし、このうえなく荒っぽく身体をねじ曲げながら転げ回り、跳びはね、絶叫し、ついには写真機の三脚の足下に身を投げ出して、見るからに写真機を壊さんばかりだった。もちろんそうはさせなかったが。わたしはあの手この手を使ったけれども、彼女を落ち着かせることができなかった。この手の人種と理解しあうのは無理だと諦めた¹⁰⁹。

先住民を人間扱いしないポペルの偏見は鼻持ちならないが——もっともポペルによれば、セルクナム族と良好な関係を築こうとしたけれど、うまくわかりあうことができずに失敗したらしい¹¹⁰——、被写体となったヤマナ族女性の写真撮影への反応も当初はほぼ同じだっただろうと容易に想像がつく。フランス人の存在に慣れてからは協力的であったとはいえ、それでも先住民の女たちは羞恥心だけは捨てなかった。

女たちは生殖器を隠すために、恥じらいの小さな衣服を身につけていて、それは腿のあいだに吊り下げられた、とても短くとても狭い三角形状のもので、グアナコの皮からできており、その毛は内側に向いていた。この衣服はその位置といい大きさといい、彫像〔の下半身〕にあてがわれた葡萄の葉をまさしく思い出させるが、それを女たちはけっして、というかほぼ絶対に脱ごうとはしない。夫婦の営みのあいだは、それはただお腹の上にまくり上げられるだけである。この衣服はけっして洗濯されることもない¹¹¹。

つまりフエゴ女性は小さなエプロンで恥部を隠すほどの慎ましさを心得ているということであり——イヤードは「〔その三角片は〕恥じらいのエンブレムである」¹¹²とべつの箇所で書いている——、その慎ましさを無視してエプロンを取り去ろうとしたのは「野蛮な」フランス人のほうであった。そのことをほのめかす文章をイヤードは残して、興味深い。

きわめて稀な例外として、カマナカル・キパ〔この美しい娘については後述〕はその小さい

¹⁰⁹ Julius Popper, *The Popper Expedition. Tierra del Fuego*. A Lecture delivered at the Argentine Geographical Institute, 5th March 1887, Buenos Aires, L. Jacobsen, n. d., p. 16.

¹¹⁰ *Ibid.*, pp. 36–38.

¹¹¹ P. Hyades, VII, pp. 347–348.

¹¹² P. Hyades, «Ethnographie des Fuégiens», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. X, 1887, p. 337. ここでは、恥部を隠す三角片は長さが12センチから15センチで、下部の幅が7, 8センチあると具体的にだ (*ibid.*)。

エプロンを身につけていないときに撮影されている〔P. Hyades, VII, planche XII, fig. 1〕。この写真を撮った、いまは亡き同僚パイアン海軍大尉はこの少女と知己の仲であったが、それでもエプロンが当てられた場所から右手をどかすことはどうしてもできなかったのである¹¹³。

写真の被写体である島民の女たちはほとんどが裸同然の姿だが、これはフランス人が撮影に際してそのように演出したに過ぎない。ダーウィンなども記していたように、女たちはふだんグアナコなどの皮の肩掛け（ケープ）をまとっていたからだ。イヤードも同様のことを書きとめている。「わたしたちがふつういう意味では、フエゴ人は衣服を着ていない。容易に手に入れられるカワウソやアシカの毛皮でいろいろな部分の服を作ることはできる。だが寒さがとても厳しいと感じるときに、マント代わりに、その皮をただ肩にかけて頸の周りで留めるだけなのだ」¹¹⁴。それゆえ、先住民は写真機を前に否応なくポーズを取らされたのである¹¹⁵。当時の人類学研究に資するための写真が必要としたとおりに、フエゴ人はいつも正面からかあるいは横顔から撮影され、写真機を前に動かないように指示されてか居心地が悪そうで、リラックスした様子もなければ笑顔もないことがその証左でもある。

こうして、イヤードはフエゴ島民にも恥の観念が存在することを確認して、臆面もなく書き記す。

この衣服がないということが恥の感情をなんら排除するものでない〔つまり、裸であることに恥ずかしさを感じる〕ことは注目すべきである。フエゴ島民は観念上に恥を有するのであって、衣装にではない。多くの事情に鑑みて確言できることは、恥の感情は彼らにも発達しているのであって、とりわけ女たちにおいてそうであることだ¹¹⁶。

「羞恥」という特別な名称がないだけで、羞恥は立ち居振る舞いのなかによく表されるのである¹¹⁷。

さらには、イヤードは『報告書』第7巻第5章「心理的特徴」に「羞恥心」の項目を立てて、こう記している。

¹¹³ P. Hyades, VII, p. 409.

¹¹⁴ *Ibid.*, p. 347. あるいは、「たいていは各自がアザラシカワウソの毛皮を持っていて、それを肩の上に掛けて、それなりに風から身を守る」とも。P. Hyades, «Ethnographie des Fuégiens», *cit.*, p. 337.

¹¹⁵ A. Chapman, *op. cit.*, p. 516.

¹¹⁶ P. Hyades, «Une année au cap Horn», p. 408. A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p. 99 より引用。

¹¹⁷ P. Hyades, «Ethnographie des Fuégiens», *cit.*, p. 334.

裸で暮らすことに慣れたフエゴ人に恥の感情がたいへん発達している、とここで読んでおそらく驚く人もいよう。自分の身体のいくつかの箇所を凝視されると、男であれ女であれ、彼らはそのときに感じる恥辱、赤面、不快感に喩えられる羞恥心というものを、物腰のなかに、衣服なしでも示す自然さのなかにはっきりと表に出す。夫婦関係のなかに恥ずかしさの観察を極端にまで推し進めたくても、彼らのあいだでは身体の箇所をじろじろ見るなどということとはけっしてないのだ。

フエゴ人のことばで、羞恥心は特別な名称をもたない。おそらくこの感情が彼らのあいだではすべての人に適用しうるからであろう。ただし恥辱を表すことばはもっている。たとえば、ounouçiou は「恥じる」を意味し、ounouçi çapanata は「恥ずかしさで赤面する」を意味する。

「内気」が恥に代わることはできないだろう。フエゴ人はこの感情を知らないからだ。彼らのよそよそしさ、見知らぬ人を前にした慎みはきわめて強烈な不信に起因するが、しかしこの態度は内気とはまったく無関係である¹¹⁸。

フエゴ女性が抱く「恥」の感情は出産時の状況にも現れている。出産はたいいてい野外でおこなわれるが、男たちの目の前でとか雑居生活を送る小屋の中でとかで出産するくらいなら、女たちがむしろ野外で寒さの苦痛を甘受するほうを選ぶのは、まさに女たちの「恥の本能的感情」がそうさせるのである¹¹⁹。「羞恥心」はノルベルト・エリアス Norbert Elias がいうような文明化の産物ではないのである¹²⁰。

ところで、前述のカマナカル・キパについて、イヤードは思い入れたっぷりに、「仲間たちとは一頭地を抜いた生来の知性と野性味溢れた優美さを兼ね備えた、とても賢い少女だった」¹²¹と書き記している。そもそもイヤードのフエゴ人女性を見る視線は好意的であった。たいいていの旅行家たちはフエゴ人をみすばらしい人種とか卑しい人種だと言い、「醜い」「下劣な」「ひどい風采」「虚弱な」「嫌悪感を与える」という形容を繰り返すが、それは大いに誇張されていて、なるほど

¹¹⁸ P. Hyades, VII, pp. 239–240. この点で、なにかと批判を浴びることの多い文化人類学者ハンス・ペーター・デュル Hans Peter Duerr が、「フエゴ島では、成人と分別のついた子ども、ことに思春期の少女はひとり残らず革製の三角形の腰布で陰部を隠したが、それでもひとの下半身を〈人目を惹くほどに〉眺めてはならぬ、との不文律が効力をもっていた」（『裸体とはじらいの文化史』藤代幸一・三谷尚子訳、法政大学出版局、1990年、145頁）と書いて、フエゴ島民が「恥の感情」をもっていたことを追認しているのは正しいであろう。

¹¹⁹ *Ibid.*, p. 375. ルーカス・ブリッジズによれば、セルクナム族の男たちは衣服を着ることなどには無頓着であるが、彼らにとって唯一の羞恥は自分の不恰好な体や肥満を見られたときだった。E. L. Bridges, *op. cit.*, p. 368; traduction française, *op. cit.*, p. 424.

¹²⁰ エリアス『文明化の過程（下）』波田節夫ほか訳、法政大学出版局、1978年、420–431頁。N. Elias, *La dynamique de l'Occident*, traduit par P. Kamnitzer, Paris, Pocket, 2003, pp. 263–273.

¹²¹ P. Hyades, VII, p. 409; *Patagonie*, *op. cit.*, p. 90.

なかには醜悪で痩せこけた、年老いた魔女みたいな女もいるが、しかし一般に小柄な男にふさわしい均整のとれた体つきをした女もいる、と反論しているからである¹²²。さて、そのカマナカル・キパとその友人シャウアルシュ・キパはオレンジ湾のヤマナ族女性グループのなかでもっとも美しいふたりで、イヤードはこのふたりの写真 (P. Hyades, VII, planche XII, fig. 2, 3) を例示しながら、「彼女らの肉体の美しさにかけては、もっともスタイルのよいヨーロッパ女性と較べても遜色はない」¹²³と褒めちぎっている。イヤードが身体計測して作成した測定表によれば、カマナカル・キパは推定年齢が18歳半で、身長は147.5センチ、座高78.9センチ、頭部の長さ（投影法による）21センチ、頭部の周囲54.5センチ、鼻の長さ4.4センチ、鼻の広さ3センチ、口の広さ（唇の両端の長さ）5センチ、顔面角78度、両肩の広さ31.5センチ、骨盤の広さ26センチ、左右の乳首の間隔22.8センチ、胸囲81センチ、腕の長さ28センチ、手の長さ18.5センチ、広げた両腕の左右の中指の距離156センチ、太腿の長さ35.5センチ、脚の長さ34.5センチ、足の長さ22センチ……¹²⁴。測定箇所はこれですべてではなく、いかに綿密に人体計測を実施していたかを思い知らされる。しかも、測定はこれら外見上のものに留まらない。パリに運ばれた石膏模型をもとにモンディエールの示した所見¹²⁵に依拠しながら、彼女の生殖器の形状まで微に入り細を穿って観察し、あげくに性交渉を経験しているものの子どもは産んでいないとまで記述する¹²⁶。イヤードはさらに、現地で同僚が彼女を生身から直接観察した記録も追記している¹²⁷。こうした生殖器の観察はもちろんカマナカル・キパのみに留まらず、フエゴ人の男女に広く及ぶ¹²⁸。19世紀ヨーロッパの科学者が舐め回すように観察するこの視線に、比較解剖学者ジョルジュ・キュヴィエ Georges Cuvier によるホッテントットのヴィーナス¹²⁹の解剖以来、性に関する人類学の伝統があったことを念頭に置かないと、現代のわたしたちは辟易するに違いない。当時、性器および性的機能の研究は人種を判定する際に有効な要素とみなされていて、プロカなども、生殖器とりわけ乳房の研究は「一

¹²² *Ibid.*, p. 122. 厳密に言えば、前註6でも示したように、この部分はドニケールが執筆したことになっているが、どうみてもこの引用箇所は科学調査団に参加して観察した者でなければ書けないであろう。ドニケールは参加していなかったため、これらの数章でもイヤードの筆は入っているように思われる。したがって以下は、便宜上イヤードによる記述として表記する。

¹²³ *Ibid.*

¹²⁴ *Ibid.*, p. 113, Tableau IV, n° 14.

¹²⁵ モンディエールは1885年にフエゴ人の生殖器を型取りした石膏模型について論文を発表しているので、おそらくそれを指している。A. T. Mondière, «Note sur quelques moulages d'organes génitaux des deux sexes pris par le D^r Hyades sur des Fuégiens», *cit.*, pp. 111–114. ただし筆者は未見。

¹²⁶ P. Hyades, VII, p. 154.

¹²⁷ *Ibid.* この記録では、カマナカル・キパが「17歳」として記されている。

¹²⁸ *Ibid.*, pp. 152–156.

¹²⁹ G. Cuvier, «Extrait d'observations faites sur le Cadavre d'une femme connue à Paris et à Londres sous le nom de Vénus hottentote», in C. Blanckaert (éd.), *La Vénus hottentote entre Barnum et Muséum*, Paris, Publications Scientifiques du Muséum national d'Histoire naturelle, 2013, annex 2.

定の重要な人類学的特徴」¹³⁰を提示すると強調しているほどである。進化論的なパースペクティブから、劣等とみなされる人種（黒人、ホットtentott、オーストラリア・アボリジニ、フエゴ人）の生殖器を類人猿のそれと比較して、猿に限りなく近い人種の特徴を確定しようとしたのである¹³¹。フエゴ人の性的特徴に関する研究をほとんど有しない現況に鑑みて、イヤードはそれに紙幅を割いたのだろう。

ちなみに、カマナカル・キパが性交渉を経験していることについて付言すると、フエゴ人は処女性を重んじず¹³²、若いフエゴ女性が結婚するまで処女を守らないことはかなり自然なことで、イヤードが検査した10歳から12歳の少女たちはもう処女を喪失していた。しかしそのことは、と文明人の倫理をそのままヤマナ族に適用することに慎重であるべきだと考えるイヤードはことばを継いでいう、彼女らが早熟な不品行に走るとか性交渉に強い欲望があるということにつながらない。ティエラ・デル・フエゴでは、性的快楽を求めることにかけては女も男と同じくらいに節度がある¹³³。いっぽうでイヤードはフエゴ人もヨーロッパ人が抱くのと同一愛情を覚えると書いている。「フエゴ人は異性間の恋愛感情をとて強く抱くようだ。片想いのときは、それが精神的苦痛の唯一の源となる。彼らにとってもそのほかの喜びにとっても劣らず、愛の動機などというものは理解できない。愛の動機はまったく説明がつかないものでありつづけるから。損得は愛にけっして関与しない。生殖的な感覚というか生殖本能が愛情に占有的な役割を果たしているわけではないのだ」¹³⁴。ただし性愛については、同じフエゴ人であっても部族によって異なるらしいことをレオン・トマ Léon Thomas は指摘している。ヤマナ族とセルクナム族は自尊心や年長者への服従や婚前性交渉は避けるべしという教えに基づいた道徳教育を子どもたちに施すが、アラカルフ族は子どもへの教育にはほとんど無頓着で、若者たちの性的放縦は留まるところがないという¹³⁵。

イヤードお気に入りのカマナカル・キパと友人シャウアルシュ・キパには後日譚がある。彼女らはともにウシュアアイに行き、そこで麻疹に罹り、1885年に同地でふたりとも死去したことをイヤードは帰国してから知ることになる。イヤードは『報告書』のなかで、麻疹がウシュアアイで猖獗していたことに触れながら、「〔オレンジ湾で生活を営む先住民グループのなかで〕もっとも美しいふたりの娘、カマナカル・キパとシャウアルシュ・キパはウシュアアイに行き、そこで

¹³⁰ P. Broca, *Instructions générales pour les recherches et observations anthropologiques*, op. cit., p. 61.

¹³¹ Ph. Revol, «Observations sur les Fuégiens : du Jardin d'Acclimatation à la Terre de Feu 1881-1891», cit., p. 282, n. 1 に負う。

¹³² P. Hyades, «Ethnographie des Fuégiens», cit., p. 334.

¹³³ P. Hyades, VII, p.188.

¹³⁴ *Ibid.*, pp. 238-239.

¹³⁵ L. Thomas, «Des peuples en voie de disparition : Les Fuégiens», cit., pp. 394-395.

同日に麻疹で死亡した」¹³⁶という一文を挿入しているからだ。ここでもこのふたりの女性の美しさに言及するイヤードであった。麻疹が流行していたウシュアエアになぜ彼女らが出かけたのかは不明だが、ふたりとも孤児であり、たぶん近親者がそこにいたので、麻疹が流行しているとも知らずに彼女らは当地に行ったものと推測される。胸塞ぐエピソードではある。

1883年9月4日に、すべてのミッションを完遂したフランス科学調査団はオレンジ湾を離れ、ティエラ・デル・フエゴに別れを告げた¹³⁷。

イヤードによる「野蛮人」弁護

1. 食人説

1883年10月に、ロマンシュ号は調査団一行をひとりも欠かすことなく乗せてシェルブールに帰港した。

帰国後、イヤードは絶滅が危惧されるフエゴ人を弁護する立場を鮮明にする。それまで繰り返されてきたフエゴ人に対する科学者たちのステレオタイプの意見を打ち消そうと腐心するのである。フエゴ人はフィッツロイやダーウィンが言い張っているような、汚くもなければ醜くもない。彼らには感情もあれば、親愛の気持ちも有している。妻を愛しこそすれ、古老を殺したりはしない。彼らは無感動どころか喜怒哀楽を表すこともでき、好奇心が旺盛で、冗談好きでもあり、想像力も豊かだ¹³⁸。豊富な言語を有し、なによりも人喰い人種などではない。あるフエゴ人少年が飢饉のときに犬を喰うよりさきに老女を喰うとフィッツロイに語った（前出引用）というのは、「薄気味悪い冗談」だとイヤードは一蹴し、フエゴ人は若かろうが年老いていようが女を大切にしており、女を喰おうとは夢だに思っていないと力説するのである¹³⁹。

ところで1881年にパリ順化園でおこなわれたフエゴ人（アラカルフ族）の展示を機に、さまざまな学者たちが未開人について議論を戦わせた。そして、フエゴ人は食人だという人類学的判断が大勢を占めた。たとえば、当時学界のリーダー的存在だった人類学者のひとり、アベル・オヴラック Abel Hovelacque はその『人種論』*Les races humaines*（1882年）のなかで、パリで観察されたフエゴ人から得られた「明証」をもとにフエゴ人の文化をこうまとめている。

¹³⁶ P. Hyades, VII, p. 234.

¹³⁷ 肝心の金星観測であるが、金星の通過は正確に観測できたらしい。ふだんはこの地域は曇天と雨天が多いのに、観測日（1882年12月6日）は晴天で、金星が太陽前面を通過するのを追跡し写真撮影することができた。E. Lucas Bridges, *op. cit.*, p. 116; traduction française, *op. cit.*, p. 142; L.-F. Martial, I, p. 469.

¹³⁸ P. Hyades, «La chasse et la pêche chez les Fuégiens de l'archipel du cap Horn», *cit.*, pp. 534–535.

¹³⁹ *Ibid.*, p. 552.

ティエラ・デル・フエゴに住む哀れな種族は、人間の原始生活のありようをかなり忠実に髣髴させるものである。フエゴ人は、男も女も裸である。せいぜい狩猟で捕らえたグアナコの毛皮を使うくらいのもので、その毛皮でどうにかこうにか肩を覆っているのだ。住居としては、フエゴ人には枝を組み合わせた粗末な小屋しかない。傍らにはいつも燃えさかる火を欠かさずに生活をしており、その火の前で無気力に、何も仕事をしないでうずくまっている。乏しい植物や、海岸で採集した貝類や、捕まえた魚を食している。そのうえ、食物〔の味〕にはまったく無頓着で、腐った鯨肉を平気で食べている。請け合えるのは、フエゴ人はなんにも食べるものがない極限状態でのみ人肉を喰らうことである。またこうも言われている、限界に達すると、フエゴ人は老女たちを煙で窒息させることで、これら老女を犠牲にすることも厭わない、と。〔中略〕顔立ち全体は無感動で、知能が欠如している¹⁴⁰。

言語学者でもあるオヴラックからすれば、進歩のないフエゴ人は、ブッシュマンやオーストラリア・アボリジニと同様に、原始的な文化に留まった種族である。身体的にも知的・精神的にもその特徴を階層化して考えるオヴラックにとって、原始的な種族は人間と猿の中間に位置し、ヨーロッパの白人が人間の完璧な規範なのであるから、未開人は人間よりも猿に近いとすべきなのだ¹⁴¹。それゆえオヴラックがダーウィンらの伝えるフエゴ人の人喰い神話にまだ呪縛されているのも当然なのである。この神話に真っ向から反対した最初のひとりがイヤードだった。

余談だが、フランス科学調査団は1883年1月にウシュアイアに寄港した際に、トマス・ブリッジズ牧師の主宰する伝道会を訪問している。このときに、ヨーロッパ各都市で見世物にされた末にフエゴ島に送還され、この伝道会に身を寄せていたアラカルフ族の生存者のうちのふたり——オヴラックも観察したであろう——と出逢っているのである。そのときの様子を調査団長マルティアルが『報告書』第1巻で記述している。

〔ブリッジズは〕わたしに、ヨーロッパの主要都市を先般訪れてパリ順化園にしばらく滞在したフエゴ人のうちのふたりを会わせてくれた。このかわいそうな人たちは、わたしがプンタ・アレナスで知ったとおり、ドイツ人実業家〔カール・ハーゲンベック Carl Hagenbeck〕によってクラレンス島で拉致されたのである。彼らが誘拐されてヨーロッパに向かったときは、男女、子ども、あわせて11人だった。彼らの多くはヨーロッパで死亡し、現在では青年と少女のふたりだけになっている。この少女はわたしたちが到着するほんの数日前に、火の中

¹⁴⁰ A. Hovelacque, *Les races humaines*, Paris, Léopold Cerf, 1882, pp. 131–133.

¹⁴¹ P. Desmet, «Abel Hovelacque et l'école de linguistique naturaliste : de l'inégalité des langues à l'inégalité des races», in C. Blanckaert (dir.), *Les politiques de l'anthropologie. Discours et pratiques en France (1860–1940)*, op. cit., p. 73.

に落ちて大火傷を負った。われらが調査団の医師、アーン博士による熱心な手当の甲斐あって、彼女は一命をとりとめた。青年のほうはヨーロッパ旅行の漠たる記憶しか留めていないようだ。しかしあとになってわかるのだが、この狡猾で疑り深い住民たちの意見を知ることとはどんなにむずかしいことか。

前述の実業家〔ハーゲンベック〕はヨーロッパの主要都市でこれらの哀れな人たちを見世物にしてから、わずかな安寧を得させるべくささやかなお金を託して、ウシュアイアの伝道会に生存者を厄介払いしたのだった。ブリッジズ師は「アラン＝ガーディナー」号で——このカッター〔1本マストの短艇〕の次の航行のときに——彼らを故郷まで送ってやるつもりでいて、のちになってこの計画は実行に移された¹⁴²。

イヤードもこの会見にごく手短に触れているが、ただしこのときに会ったのは「3人」だとしている¹⁴³。そのうえで、「彼らは精神的にひどく落ち込んでいて、ヤーガン〔ヤマナ〕族のことはひとつも理解せず、宣教師たちは彼ら〔3人〕のことはまったく知らなかった」¹⁴⁴、と記している。フエゴ人であっても、部族が異なればことばが通じないのである。

閑話休題。イヤードの弁護活動にもかかわらず、飢饉のときにフエゴ人は役立たずの老婆を殺してその肉を食べるという、フィッツロイからダーウィンに伝えられた人喰いの神話を打破することはできなかった。ダーウィンらが先住民の少年から食人の風習の証言を得ているし、そのほかの探検家たちも同様の証言をしていることが、食人風習説の支持者たちの根拠となっていた。たとえば、1881年に順化園で展示されたアラカルフ族を観察したアルフォンス・ベルティヨン Alphonse Bertillon——パリ警視庁に所属し、個人の同一性の判定技術（「ベルティヨン方式」）を創出した——も尻馬に乗って、フエゴ人＝人喰い人種説を反復する。ダーウィンの旅行記を典拠として、「冬になって、狩猟や漁の収獲が思わしくないと、フエゴ人は犬どもを喰らうより先に同じグループの老婆を喰らうのである」¹⁴⁵と書いてはばからない。「〔フエゴ人は〕人喰い人種であ

¹⁴² L.-F. Martial, I, p. 115.

¹⁴³ P. Hyades, VII, p. 13. ヨーロッパに連れて行かれたアラカルフ族の生存者とのこの面談では、彼らは頑なに無言をとおして質問には答えなかったのが、イヤードはいささかも情報が得られなかったらしい。P. Hyades, «La chasse et la pêche chez les Fuégiens de l'archipel du cap Horn», *cit.*, p. 514. そのいっぽう、「予備報告」(1884年)でイヤードは、先住民の男と結婚して、オレンジ湾に住むふたりのアラカルフ族の女のことに言及して、「このふたりの女は1881年にパリで観察されたフエゴ人 (la race fuégienne) に属する」(P. Hyades, «Rapport sommaire sur les recherches d'Histoire naturelle faites par la Mission du cap Horn», *cit.*, p. 39), と報告しているが、これは1881年にヨーロッパで見世物にされた本人たちというよりも、むしろたんに同じアラカルフ族の女を意味するように思料される。

¹⁴⁴ P. Hyades, VII, p. 13.

¹⁴⁵ A. Bertillon, *Les races sauvages*, Paris, G. Masson, s.d. (1883), p. 195. ちなみに、ベルティヨンはフエゴ人展示を「1880年」と書くが (*ibid.*, p. 194), これは「1881年」の誤記である。ベルティヨン方式については、渡辺公三『司法的同一性の誕生』言叢社、2003年を参照。

り、喰うために好んで女を殺す」¹⁴⁶と断じるのは、民族誌学者、言語学者のピエール・アンリ・リシャール・ド・リュシ＝フォサリウー Pierre Henri Richard de Lucy-Fossarieu の『南米大陸の民族誌——パタゴニア人、アラウカーノ語族、フエゴ人』*Ethnographie de l'Amérique antarctique. Patagons, Araucaniens, Fuégiens* (1884年)である。この一文でフエゴ人の食料に関する段落が締められるのだが、これには詳註が付されている。ヨーロッパに連れてこられたフエゴ人女性が人骨をかじっているところを発見されたことを報告し、さらに、ある船長が飲料水を求めに弟たち船乗りをフエゴ島に上陸させたが、何時間経っても戻ってこないで船長みずから探索に行くと、12人ほどのフエゴ人が弟らの死体を切り刻んであぶり焼きにしていたという、それこそステレオタイプまがいの人喰いの図を展開していて¹⁴⁷、著者の人喰い人種への思い入れがたっぷりであることをはしなくも見せつけている。しかもリュシ＝フォサリウーの著書は、イヤードらフランス科学調査団が帰国して成果を公表しはじめているところに発表されたものである。それにもかかわらず、彼もダーウィンを参照しながら「食人説」を繰り返しているありさまなのだ。この人喰い人種というレッテルを利用して莫大な利益を得たのが、ふたりのフエゴ人との会見を記したマルティアルの前掲した文章にもあるカール・ハーゲンベックであった。フエゴ人は1881年にパリ順化園で展示され、ついでベルリン動物園で駝鳥の囲いのなかに入れられて見世物にされた。そのときのセールスポイントが「人喰い人種」だったことをハーゲンベックは打ち明けている。「これらの種族が正真正銘の人喰い人種だというのは真実です。「人喰い」というレッテルがもつ力を証明するために、先月の順化園収入がほぼ15万フランに達したことをいわせていただきたい」¹⁴⁸。「人喰い人種」というセンセーショナルな文言を広告に使うことでおびただしい観客を動員することができたという意味で、ハーゲンベックは正しかった。ベルリン動物園での展示を予告する当時の新聞記事（1879年3月29日付）からしてすでに、蠱惑と恐怖に彩られた文言が紙面に躍っていた。曰く、「〔フエゴ人〕は統治というものを知らない。彼らは首長もなしに海岸沿いを移動し、魚やらベリーやらアザラシや鯨の死体を喰っている。必要とあらば、彼らは人間を喰うことも辞さない。彼らの話すことばはたいてい、耳障りで短く、^{こうおん}喉音の雑音からなる」¹⁴⁹。あいもかわらぬ食人説だ。これほどまでにフエゴ人の食人神話は広くヨーロッパに流布していたのである。

¹⁴⁶ P. de Lucy-Fossarieu, *Ethnographie de l'Amérique antarctique. Patagons, Araucaniens, Fuégiens*, Paris, Maisonneuve frères et Leclerc, 1884; Nabu Public Domain Reprints, p. 165. 彼も1881年のフエゴ人展示を観察して (*ibid.*, p. 158, note 1), クックが指摘したような臭い体臭（前出）を「黒人のようには」発しない、とも述べている (*ibid.*, p. 162)。

¹⁴⁷ *Ibid.*, p. 165, note 1.

¹⁴⁸ G. Bruce, *Through the Lion Gate. A History of the Berlin Zoo*, Oxford, Oxford U. P., 2017, p. 72 より引用（傍点、筆者）。人喰い人種というステレオタイプがフエゴ人に限らず未開人一般に通じることは言を俟たない。

¹⁴⁹ *Ibid.*

こうした四面楚歌の状況で、イヤードは『報告書』第7巻で数頁を費やして、フエゴ人のあいだに食人の風習が存在しないことを縷々説明しているが、イヤード自身が「この明白な過誤」¹⁵⁰を払拭すべく繰り返してきた活動を振り返った書簡があるので¹⁵¹、ここではその書簡に沿ってイヤードの孤軍奮闘ぶりを概観してみよう。それは1888年7月22日の日付をもつ、プレスト港の艦上でしたためられた書簡で、パリ人類学協会の事務局長シャルル・ルトゥルノー Charles Letourneau に宛てられ、1888年10月18日のパリ人類学協会会議の席上で読み上げられた。イヤードがこの書簡をわざわざ事務局長に送りつけたきっかけは、『パリ人類学協会会報』の最新号(1888年1-2月号)に掲載された討論に、あいかわらずフエゴ人には人肉食の風習が存在すると書かれてあったことに苦々しい思いをしたからであった。「ホーン岬フランス科学調査団が帰国して4年半にもなって、しかもフエゴ人に対して向けられたカニバリズムの非難が誤りであることあるごとに何度も注意を促したのに、こうした主張をまた読むことになろうとは悲しいものがあります」と。「古くからの言い伝えに基づいた誤謬ほど根絶やししがたいものではありません」の文言で始まるこの書簡は、とくに同会員(フランス学士院メンバーでもある)ナダイヤック男爵 marquis de Nadaillac を念頭に置いた反論になっている。イヤードによれば、1884年12月にこの件でナダイヤック男爵と意見を交わしたときに、男爵はイヤードの意見を受け入れて機会があれば自説の誤りを修正すると私信で書いてきていたのに、卓越した探検家たちからフエゴ人が人喰いであるとお墨付きを得たのだと、あいかわらず前述の会報最新号¹⁵²で自説に固執しているのを讀んだのである。「白状すると、こうした誤謬の根深さに自分が無力だと思い知らされます。一度ならず誤謬を論駁して本当に何かの役に立つのかどうかかわらなくなります」。実際、イヤードは何度もこの謬見に異議申し立てをしてきたのである。1881年1月と1883年12月にそれぞれ科学アカデミーで、人喰いの風習はフエゴ人に存在しないと報告した。1884年の雑誌論文「ホーン岬島嶼のフエゴ人に関する衛生上および医学上の所見」«Notes hygiéniques et médicales sur les Fuégiens de l'archipel du cap Horn»でも、フィッツロイやダーウィンが伝える話は、「フエゴ人が探検家たちに好んで話すまったくのでっち上げ、作り話でなんら根拠がない。空腹にどんなに苛まれようと、フエゴ人は決しておたがいに喰いあうことはない。人喰いの風習が彼らには皆無なのだ」¹⁵³と断言したし、1885年6月発表の「ホーン岬での一年」でも同じ主張を繰り返した¹⁵⁴。さらに1887年5月19日のパリ人類学協会会議では、エルネスト＝テオドール・アミー

¹⁵⁰ P. Hyades, VII, p. 257.

¹⁵¹ P. Hyades, «Correspondance», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. XI, 1888, pp. 502-506. 以下、煩雑になるのを懼れて引用頁を逐一明示しない。

¹⁵² «Suite de la discussion sur l'anthropophagie», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. XI, 1888, pp. 27-46 におけるナダイヤック男爵の発言 (pp. 29-30)。

¹⁵³ P. Hyade, «Notes hygiéniques et médicales sur les Fuégiens de l'archipel du cap Horn», *Revue d'hygiène et de police sanitaire*, 6^{me} année, 1884, p. 564.

¹⁵⁴ P. Hyades, «Une année au cap Horn». Ph. Grenier, *Histoires du bout du monde*, op. cit., pp. 637-638 に引用。

Ernest-Théodore Hamy, オヴラック, ルトゥルノーらの連名で起草された「社会学・民族誌学質問表」《Questionnaire de sociologie et d'ethnographie》(1883年)に答えるかたちでイヤードは発表をおこなった。その質問事項のひとつに、「食人の慣習はあるか？まだ人喰い人種はいるのか？もし存在するなら、好んで子ども、女、老女を食べるのか？食べられるのは部族のメンバーか、それとも外国人、戦争捕虜、犯罪人だけなのか？」¹⁵⁵とあるのだが、それに対してイヤードは、「食人の慣習などはなんら存在しない」¹⁵⁶と断じた。発表後の討論では、「フエゴ人のような未開の人種はどれもこれも例外なく人喰い人種だ」というルトウルノーの暴論¹⁵⁷に、「それこそまったくの伝説です」と反駁し自説を補強する意見を述べてから、こう付け加えている、「人喰いの風習などというものが記憶の痕跡も残さずに存在するということが過去にありえたでしょうか？それこそがたいそう注目に値しうる疑問なのです。〔中略〕そのような証拠も慣習も残っていないのです」¹⁵⁸。そのうえ、ロマンシュ号でティエラ・デル・フエゴへ調査に同行したマルティアル海軍中佐も『報告書』第1巻で、フエゴ人にそのような「残酷な慣習」は存在しないと書いているのではない¹⁵⁹。このようにイヤードはことあるごとに人喰いの根深い誤解を解こうとしてきたことを列挙して、思わず憤懣がペンの先から漏れる。「こうした仕事すべてが外国では、たとえばイタリアやドイツでは読まれ研究されているのに、どうしてパリではこれらを見捨てるふりができるのだろうか？」。イヤードの、憤懣にも似た苛立ちがこれほど表出されるのも稀である。

ダーウィンに継承されたフィッツロイの話があいかわらず執拗に繰り返されるのを、まったく根拠のないでっち上げられた話であると修正しようと努めてきた。「しかし」、とイヤードは憤怒を通り越して、もはや無念さを隠しめせずに『報告書』第7巻で書かずにはいられなかった。「アメリカ人類学会での議論で〔中略〕ふたりの学者がなおも断定したのだ、フエゴ人はほかに食べるものがないのだから老婆たちを食べているし、少なくともフィッツロイの時代から食べてきていた、と」¹⁶⁰。科学的観察をしてきた証人として、ひとりの医師として、フエゴ人に対する誤解と偏見を晴らすことができなかった苦い無力感だけがイヤードには残されたのである。

イヤードに賛同する意見は、半世紀ほど経て、ルーカス・ブリッジズからも提示された。ここ

¹⁵⁵ E. Hamy, A. Hovelacque, J. Vinson et Ch. Letourneau, «Questionnaire de sociologie et d'ethnographie», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VI, 1883, p. 585.

¹⁵⁶ P. Hyades, «Ethnographie des Fuégiens», *cit.*, p. 340.

¹⁵⁷ *Ibid.*, p. 341. 「野蛮きわまりない人種」は「例外なく」すべて人喰い人種なのだから、フエゴ人もそうであるはずだという予断がルトウルノーにはあった。自分の予断と齟齬をきたすとイヤードのような現地に旅して観察してきた者の証言をはねつけようとして、ルトウルノーの思考は停止してしまうのである。C. Blanckaert, *op. cit.*, pp. 494-495.

¹⁵⁸ *Ibid.*, pp. 343, 344. この文言は翌年に同会議で読み上げられたイヤードの前述の書簡にも引用されてある。P. Hyades, «Correspondance», *cit.*, p. 504.

¹⁵⁹ L.-F. Martial, I, p. 193.

¹⁶⁰ P. Hyades, VII, pp. 258-259.

にフィッツロイやダーウィンが唯々諸々として受け入れていた食人説は明快に斥けられるのである。永年先住民と日常的に接触してきたルカスは、「このショッキングな誤解」がなぜ生じたのかを説明しようとする。ヨーク・ミンスターにせよジェミー・バトンにせよ、白人から質問されたとき、彼らは本当のことを言おうとは毛頭思っていなかったと推測される。彼らには白人たちが期待していると思われる返答をすることが大切なのだ。その昔、英語もよくわからないのに、彼らにどうして長々と説明することができようか。「はい」とか「いいえ」と答えておくほうがずっと手短かにすむ。これら先住民に帰せられる証言は質問者が与えた示唆に沿うような同意をしたにすぎないのだ。「お前たちは人間を殺して喰うのか？」というような滑稽な質問に対する彼らの反応は容易に想像できよう。最初は当惑しても、何度も繰り返される質問に、ついに質問の意味を理解してどのような返答が期待されているかを悟る。「どんな人間を喰うのかね？」と質問者は続ける。返答がない。「悪者を喰うのか？」「そうだ」「悪者がいないときはどうするかね？」、返答がない。「老婆を喰うのか？」「そうだ」。白人がこの類いの話を聞いて喜ぶとなれば、フエゴ人は話をでっち上げつづけるのである。この話がいったん真に受けられると、もうこれを否定しようと試みても失敗に終わるのだ……¹⁶¹。

2. 未開社会——自由と平等と寛容

イヤードは先住民の頭部や身体部分の石膏模型づくりや人体計測に執着したものの、ヤマナ族をもっとも献身的に世話をし、関心をもって観察した医者であった。彼はヤマナ族の慣習の本質を深い洞察力とオリジナリティーをもって看取している。

この特異な未開先住民の慣習のなかで圧倒的なのは自由への無条件の愛であり、あらゆる束縛への嫌悪である。この感情が抑制されるのは家族の制度に関わるときだけで、家族構成員は相互連帯の絆をしっかりと保っているのだ、共通の危険をまえにしても一致団結するし、離れて暮らしていてもおたがいに助けにやってくる。たぶんこの自由への愛が、文明の心地よさよりも自分たちの未開生活のほうを断乎として好むようにさせているのだろう¹⁶²。

¹⁶¹ E. L. Bridges, *op. cit.*, pp. 33–34; traduction française, *op. cit.*, pp. 46–47. イヤードもフエゴ人のごまかしに猜疑心を抱いている。「この種族特有の特性のひとつは[中略]、本当のことを言わないという性向である。それが内気からくるのか、警戒心からか、あるいはたんに人をたぶらかしておもしろいからなのか。下卑たことを使ってよければ、実際並外れた「他人を煙に巻く人たち」なのだ。が、こうした彼らの反応の仕方が、ダーウィンやフィッツロイのようなもっとも権威ある旅行者たちの誤謬を説明するものなのだ」(P. Hyades, «Observations anthropologiques et ethnographiques à la baie Orange», *cit.*, p. 565)。

¹⁶² P. Hyades, «Une année au cap Horn». Ph. Grenier, *Histoires du bout du monde*, *op. cit.*, pp. 640–641 より引用。

この「自由への無条件の愛」に関連してイヤードは、ヤマナ族の社会がどれほど平等であり、社会的位階などなく、個人主義的であるかを説明する。ヤマナ族は外国船がやって来るとみすばらしいカヌーを漕いで近づき、ひもじそうな身ぶりを交えてパンや古着をくれと懇願するが、他方で、彼らの掘っ立て小屋に一步足を踏み入れたり沿岸で出会ったりしても、彼らは軽蔑するような沈黙でもって接し、歓迎する様子を見せたりはしない。これは彼らの冷やかかさであり、自分たちに敬意を払うよう要求するものであり、これを要するに高慢な挙動なのである。だが、とイヤードはことばを継ぐ。

この「慢心という」感情の根っこには絶対的な自由とまったき平等が存するかもしれない。彼らは首長も戴かなければ、賃金労働者も奴隷も知らないままに平等を満喫しているのである。さらには、後述する彼らの寛容な習慣と相反する、顕著な自己^{エゴイスム}本位にも存しているかもしれない。フエゴ人が自分本位になるのは、隣人の助けなどを当てにせずに、家族単位で離れて暮らすだけで充足するという習慣からたぶん来るのだろう¹⁶³。

なるほど、「フエゴ島民の部族内で各人が完全に平等に扱われていたこと」、「力の強い首長」が存在しないこと、これらはすでにダーウィンが指摘したことであった。だからこそ、統制システムを確立しないフエゴ人は進化していない、文明の発達が遅れている、という結論に達したのだった。いわばフエゴ人の平等、富の分割をダーウィンは文明段階的には否定的に見ていることになる。また、首長をもたず、統制システムを確立せず、ものを分かち合う社会はなにもフエゴ人に限らず、16世紀スペインのイエズス会士ホセ・デ・アコスタ José de Acosta が野蛮人を三つのグループに区分し、その最下層のグループ——「これらの人びとは法律をもたず、王を戴かず、条約を結ばず、役所もなければ、確固とした統治制度もなく、住処をたえず変える」¹⁶⁴——は新世界の住民に多いとすでに指摘しているとおりなのだ。さらに文化人類学は、たとえばブッシュマンやピグミーのようなアフリカの狩猟採集民も平等主義的であり、権威的な社会構造がつくられていないことを明らかにしている。したがって、「王も首長も戴かず、貴族階級も特権階級も社会的位階も存在せず、奴隷もいない。それは本来の状態のままにある平等な形態である」¹⁶⁵というイヤードのヤマナ族社会への見方はけっして独自のものでないといえるかもしれない。しかしイヤードは平等主義的な社会を肯定的に捉えるだけでなく、そこには個人主義に通底する自由への志向、寛容の精神をも看取していることはやはり特筆するに値しよう。ヤマナ族はものを共有するのではなく、ひとにものを贈る喜びを味わいたいから所有するにすぎない。共有はもは

¹⁶³ P. Hyades, VII, p. 242.

¹⁶⁴ アコスタ『世界布教をめざして』青木康征訳、岩波書店、1992年、10頁。

¹⁶⁵ P. Hyades, «Ethnographie des Fuégiens», *cit.*, p. 335.

や彼らにあっては義務ではない。

上掲の引用でも言及された、「寛容の気質はフエゴ人の特徴である」ことをイヤードは強調して、こうつづける。

所有しているものはなんであれ、周囲の人びと全員と分かち合うのを好む¹⁶⁶。これが所有物を共有する結果だとはいえない。共有の富など〔ティエラ・デル・〕フエゴには存在しないからだ。各自は自分で汗して作ったもの、漁や狩猟で獲たもの、海岸でたまたま見つけたものを私有しているだけである。ほんの小さい子どもたちでも、それが何であれ貰ったものを自分の所有とする権利を有するのである。しかしながら、なによりも先住民は所有物を分配する権利をもつために、そして贈り物をする喜びのために、ものを所有したがるのである。

このことからよく外国人とのあいだに誤解が生じる。外国人は取るに足らないがらくたと交換して、武器や毛衣服のための皮革を買いつけているつもりなのだが、フエゴ人のほうはこれからもずっと継続する会見でお礼返しを貰うことなく〔無私の〕贈り物をしたつもりでいるのだ。

寛容な性向は当然ながらもてなしにつながる。掘っ立て小屋がどんなにもで溢れていようが、食べ物の量がどんなに少なかりょうが、新来者にはつねに団欒に加えられて、食事にありつくことができるのだ。だが、いつも冷ややかに、沈黙のうちに、ある種の警戒心をもつてもてなしを受けるのである。新来者が食糧をもっていれば、もてなししてくれる^{あるじ}主たちとそれを分かち合わねばならないだろう¹⁶⁷。

この寛容の精神に通底するのが、人間の生命への尊重であろう。イヤードによると、ヤマナ族はけっして戦争のために遠征はしない。殺人に到ったケースも、1871年から1884年までに22件以上には達することなく、年に2件平均ということになる。「しかもなんの法律も知らないけれど、

¹⁶⁶ ものを独占しない、自由に分かち合う、ということに関連して、ジュリウス・ポペルが興味深いエピソードを紹介している。あるイングランド領事が牧羊場をつくったところ、羊や馬の頭数がどんどん減っていった。たまたま所有者が、親しく出入りしていたセルクナム族グループがいつものようなグアナコの毛皮ではなく羊皮のケープを着込んでいるのを目撃して、ことのすべてを悟った。「まったくこのことは連中の驚くべき共産主義的傾向を示していた。馬や羊は牧羊場の所有物なのだからグアナコと同類と見なすべきではない、と彼らに説明しても無駄であった。〔中略〕〔彼らの理論はこうだった。〕〔これらの動物はすべてグアナコだ。馬は大きいグアナコだし、羊は小さいグアナコだ〕」（J. Popper, *The Popper Expedition. Tierra del Fuego*, op. cit., p. 37）。島にあるものはすべて共有されるべき（これをポペルは「共産主義的」と形容したのでらう）であるから、グアナコがみんなのものであるように馬や羊もみんなのものであり、自由に分け合えばよいという考え方は、ポペルのような金儲け主義的な白人にはどうにも理解できず、それは泥棒行為としか映じなかったのである。

¹⁶⁷ P. Hyades, VII, p. 243.

各自が正義感をもち、自分で自分を律する国においてこうなのだ。ホーン岬の島嶼で殺人件数が少ないのは、人命を神聖なものと思なす先住民の根強い慣習に説明されよう」¹⁶⁸。だから彼らはできるだけ喧嘩や悪口を避けようと努め、友人らが仲裁に入り、武器を取り上げようとする。それでも殴り合いが始まると、当事者それぞれの親戚や友人たちが援軍に駆けつけてくる。前述した家族の連帯精神がここでも発揮されるわけである。法律は存在せず、首長も存在しない、平等な社会で各自がおのれを律する。このような未開人社会を指摘するとき、イヤードが未開の社会とヨーロッパ文明を較べたい衝動に駆られなかったとだれが断言できよう。

こうしてイヤードはフエゴ人のかなり複雑な性格をまとめていう。フエゴ人は大きな美点もないが、大きい欠点もないし、美德を知らなくとも、かといって悪行を働くわけでもなく、ずる賢くとも陰険なわけでもない。ときにはかっとなって暴力をふるうことはあっても、残酷でもなければ悪意があるわけでもない。人づきあいが悪く猜疑心が強いとか非社交的だとよく批判されるが、長いことつきあっていれば、彼らの特徴をなす寛容な気質が悪いどころかむしろ好ましく思われる、と¹⁶⁹。医師イヤードのフエゴ人に対する「診断」は、フエゴ人社会の未開性を言挙げするどころか、かえってヨーロッパ人の否定的な面をあぶり出すものになっているといえよう。自由への愛と平等な社会、寛容な精神。じつはそれらこそ、束縛が多く沈滞した文明生活を送るヨーロッパ人が久しく見失っていたものではなかったのか¹⁷⁰。

3. 渡来性の疫病、あるいは科学の進歩

人喰い人種というステレオタイプの排撃、ヨーロッパ人がいまや見失ったかにみえるフエゴ人の自由への愛と寛容の精神の称揚、そしてこれらの擁護につづいてイヤードがフエゴ人を弁護するために声を上げた告発が、ヨーロッパ文明が先住民にもたらした禍である。

イヤードがはじめてウシュアイアを訪れたのは1882年11月13日のことだが、同年4月から6月までに、ウシュアイアのイギリス国教会伝道施設にいた先住民150人の多くが痛ましいことに病死していた¹⁷¹。イヤードはエッセー「ホーン岬での一年」のなかで伝道所を訪れたときの印象を綴っている。伝道所に保護されている先住民は衣服を身につけ、住み心地のよさそうな小屋を構え、なかにはよく手入れされた庭を所有する者もいて、イヤードが知っているオレンジ湾の先住民ほどは未開でなかった。ところがイヤードには、伝道所にいる先住民たちはことごとく、カ

¹⁶⁸ *Ibid.*, p. 374.

¹⁶⁹ *Ibid.*, pp. 243–244.

¹⁷⁰ イヤードはつぎのようにも書いている。「この先住民は際立って人づきあいがよく、どんな会合にも親しく加わり、まったく自由にどんな小屋であれ出かけていき、まったく平等のうちにみんな暮らしているので、外国から来た訪問者たちの威圧的で、不愉快で、疑い深い振る舞いを理解することができなかった」(P. Hyades, VII, p. 381)。

¹⁷¹ *Ibid.*, p. 228.

ヌーに乗って裸でここを立ち去って自由気ままにその日の食料を探しに行き当たりばったりに出かけるほうを選んだフエゴ人ほどには幸せそうに見えなかった。ちょうど人間の飼い馴らす動物と野生の動物のように、伝道所に留まる先住民と気ままに移動しながら暮らすノマドの先住民とのあいだには、馴化と独立不羈の対比が見られるのである。このことからイヤードは伝道所の功罪に言及する。ここは、小枝と獣皮などで組み立てられた粗末な掘っ立て小屋に代わって、わずかな家々と、教会、学校、孤児院がある小さな村の体をなしていた。イヤードがそこで目にしたのは、広大な庭付きの農場といってもいいくらい大きな3軒の家屋だった。このフエゴ人たちは庭で馬鈴薯、燕、苺を栽培し、庭を囲い込み、板を鋸で挽き、藁葺きの家を建てることも、道をつくることもできた。伝道所には山羊などの家畜が飼育され、孤児院には孤児25人が養育されて、服を着せられ、教育を受けていた。そこでは宣教師が規則を定める立法者であり、先住民はつねに彼らの決定の言いなりになる隷従者である。このウシュアエアの中心地から宣教師の活動はあらゆる方向に拡大していると述べたうえで、イヤードは伝道所の問題点を指摘する。15年前から宣教師たちは努力してきているけれど、文明に与して生活様式を変え、伝道所に定着したのはほんの一握りの、取るに足らぬ数の先住民に過ぎない。ほかの大部分の先住民は伝道所の存在を知って数日間をそこで過ごすことはあっても、そこに住むことには同意しなかった。「彼らは」、とイヤードはことばを継ぐ、「自由で、自立した、気の向くままに移動する生活のほうが、貧しくとも未開生活の魅力に満ちていて、ずっと好きなのだ。飢えた窮乏生活をそれほどせずとも確実にものが得られる生活のためとはいえ、文明的な生活で日々心配事が絶えず、いつも働き、制限された生活のために、ウシュアエアに留まっている同郷の藁葺き家屋と畑を所有する者たちの状態よりも」。だから一、二年はここに滞在して住まいや畑を貰っても、所有したものをなんの惜しげもなく捨て去り、ある日不意に姿をくらまし、もとのカヌー生活を再開する者がひとりならず存在するのだ¹⁷²。ここでも、イヤードはヤマナ族の自由な移動生活を文明人の気が滅入る束縛の多い生活と対峙させているのである。

このように、キリスト教伝道所の影響のもと文明化が進展するのは、フエゴ人全員にとって取り返しのつかないものになると実感する者がいて、イヤードもそのひとりだったのである。この点で示唆に満ちているのが、バタゴニア旅行記のアンソロジーを編んだフィリップ・グルニエ Philippe Grenier がすでに言及したように¹⁷³、イヤードが参加したフランス科学調査団の団長マルティアルのまとめた『報告書』第1巻のテキストをイヤードのテキストと並置させることである。そもそもイヤードは、マルティアルの報告書に見られる民族誌的観察とイヤード自身の観察とのあいだに一線を画し、人類学の手ほどきも受けていない一介の海軍将校が著した紀行の範囲

¹⁷² P. Hyades, «Une année au cap Horn». Ph. Grenier, *Histoires du bout du monde*, op. cit., pp. 616–618 より引用。P. Hyades, VII, pp. 233–234 も参照。

¹⁷³ Ph. Grenier, *Histoires du bout du monde*, op. cit., p. 608.

に自分の著作が収まるものではないと述べて、自身の報告書との相違を強く意識していた¹⁷⁴。イヤードのプロとしての矜持が素人の報告書と同一視されることを許さなかったのである。そのマルティアルがフエゴ人とウシュアニアの伝道所に関心を寄せるとき、彼はつねに「未開」に対する「文明」の進出のメリットに立ち戻る。フエゴ人はモラルに欠けるとか、彼らに所有本能を育てることで彼らを文明生活に導くのだとか、マルティアルは首尾一貫したイギリス国教会支持者であることを露呈している¹⁷⁵。事実、「マルティアルはフエゴ人を文明化するためにこの勇気ある宣教師たちが払った努力は正しいと満腔の評価を下している」¹⁷⁶、とイヤードはマルティアルの論点を看破している。ついでに付言するならば、ポペルもマルティアルの意見に与して、「この伝道所は、〔中略〕博識なダーウィンが進化の鎖の失われた環〔ミッシング・リンク〕をてっきり発見したと思い込んだその人種〔もちろんフエゴ人のこと〕に文明の恩恵を届けるという営むべき目的でもって設立された」¹⁷⁷、と伝道所の存在意義を強調している。

そのようなマルティアルとは対蹠的に、イヤードは「フエゴ人がひとたびイギリス人宣教師たちによって部分的に文明化されるや、先住民の慣習と生活律が変化してしまった」¹⁷⁸という認識をもっていた。イヤードはおのれのものさしでもっぱらフエゴ人を判断することはせず、彼らのことを理解しようとし、自分とフエゴ人のあいだに立ちほだかることばの壁にもかかわらず、自分はフエゴ人の社会組織や価値観、とりわけウシュアニアの伝道所で安逸を貪るよりも海峡で移動生活を送るほうを好む彼らの自由志向を理解できたと主張するのだった。結局はキリスト教伝道所がフエゴ人の依存心を強めてしまって、彼らが生き残るための術を失い、疫病に打ち勝てなくなる危険性を、イヤードは感じ取っていたのである。イヤードの「ホーン岬での一年」からの一節を引いておこう。

この未開人たち〔ヤマナ族〕は、ウシュアニアに移り住む者たち〔伝道所に身を寄せるフエゴ人たち〕が自分たちの伝統的な生業の方策でもって窮乏にも生き延びていく習性をいまや急激になくしていると気づいているのだ。彼らの息子たちはもはやカヌーを製作することもできなければ、カワウソやアザラシを狩猟するための鉤^{もり}を作ることもできずに、食べていくのに〔伝道所の〕イギリス人たちの善意に依存しているのである。彼らがウシュアニアから逃げ出したのは、そこでの病気が、食べ物^{のせい}であれ持ち込まれた疫病のせいであれ、ほ

¹⁷⁴ *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. XI, 1888, pp. 50–51. 1888年1月19日のパリ人類学協会会議で、欠席したイヤードの名前で、ドニケールがマルティアルの旅行記の出版を報告したなかに、マルティアルに対するイヤードの真意が窺われる。

¹⁷⁵ L.-F. Martial, I, pp. 220–228.

¹⁷⁶ P. Hyades, VII, p. 380.

¹⁷⁷ J. Popper, *The Popper Expedition. Tierra del Fuego*, op. cit., p. 45.

¹⁷⁸ P. Hyades, VII, p. 233.

かの地よりもっと致命的であるからなのだ¹⁷⁹。

しかし、当のブリッジズはもっと楽観的であった。ウシュアアイア伝道所の先住民の多くが病気で死んでいっても、遠隔地に住む先住民よりはまだまだしだとして、ウシュアアイアに定住するフエゴ人の生活は幸福だと主張した。衣服を着て、生活秩序も食物も文明化されれば先住民の健康にも有益なはずで、未開人は生活様式が文明化されると破滅的だと思っているなどというのは馬鹿げていると力説するくらいなのだから。だが、同僚の宣教師ですらウシュアアイアでの疫病の広まりを懸念する者がいたのだし、ブリッジズの認識はイヤードから厳しく批判される体のものだった¹⁸⁰。伝道会の教化政策——ヨーロッパ人の古着の提供、魚や肉だけの食事に代わるさまざまな食材による食事の導入、園芸のような新しい技術の習得、カヌーづくりのようなもう古くさい仕事は辞めること——は先住民のためになるとブリッジズは信じ切っていた。服を着ていれば寒さも防げるし、集会にも礼儀正しく出席できる、それに健全な自尊心と品のある拳措を育成することになる、と信じて疑わなかった¹⁸¹。

案の定、帰国したイヤードはブリッジズから1883年4月24日付の手紙で麻疹が猛威をふるっていることを知らされると¹⁸²、麻疹は外国人が持ち込んだものだと喝破していた。1886年4月のパリ人類学協会会議の席上で「すでに述べたように、麻疹の病原菌がアルゼンチン人〔1884年にアルゼンチン政府がウシュアアイアにフエゴ島の行政を布いた〕によってフエゴ人にもたらされたことは疑いない」¹⁸³と断言していたからだ。

1885年3月5日のパリ人類学協会会議で、イヤードはフエゴ人の現状は悪化の一途にあると警鐘を鳴らした。麻疹だけでなく結核までもがウシュアアイアで猖獗をきわめているのは、宣教師たちがこうした病気を伝染させたことにある、と彼はすぐに得心したのである。

現在置かれているフエゴ人の今後の観点からすると、改めてつぎのことに注意を促しておきたい。結核という、イギリス宣教師たちが到来するまではフエゴ人には未知であったか稀だった病気が、ここ2年以上もまえから、ビーグル水道沿岸で暮らし、伝道会の中心地ウシュアアイアにことさらにしげしげと通う住民のあいだに猛威をふるっている、と。この恐ろ

¹⁷⁹ A. Chapman, *op. cit.*, p. 522; A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p. 106 より引用。

¹⁸⁰ それでもまだ1883年2月の時点では、フエゴ島民のあいだでの結核の拡散はトマス・ブリッジズの献身的な世話で食い止められるものとイヤードは希望を抱いていた。P. Hyades, «Contributions à l'ethnographie fuéguienne», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VII, 1884, p. 168.

¹⁸¹ A. Chapman, *op. cit.*, pp. 484–486, 490.

¹⁸² P. Hyades, «Observations sur les Fuégiens», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VI, 1883, pp. 617–621.

¹⁸³ P. Hyades, «Les épidémies chez les Fuégiens», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. IX, 1886, p. 204.

しい病気を広めるのに一役買っている原因は飲酒癖とかその種の不摂生にあるのではない。そうではなくて、締め切った小屋の中での閉じこもった生活にその原因を求められねばならない。雨曝しになって、衣服も身につけず、十分な食べ物もないが、さりとて伝染病の病原菌から遠く離れて、大気の中で過ごす未開人の自由な生活に取って代わってしまった付けといえる。〔中略〕このフエゴ人のあいだの結核の流行において、〔それに与って力があつたのは〕イギリス人¹⁸⁴によって持ち込まれた特殊な細菌か、伝道会に近づいたフエゴ人の生活様式の大きな変化に帰せられる¹⁸⁵。

フエゴ人の土地のアルゼンチンによる実質的な専有化などのように、「文明化を促進する新しい要素」が出現することで危険は差し迫っているとイヤードは警告したうえで、新鮮な空気の入れ替えが不十分な家屋に住んで、汚れた空気を吸うこと、健康者と病者が雑居生活を送っていること、結核に罹った外国人との接触、これらの状況を改善することが先住民の危機を回避する手段であると提言する。天然痘、発疹を伴う発熱、梅毒はいまのところ発症していないが、それも時間の問題だ。「すでに麻疹がちょうど発症したところである。最新の手紙による悲報によれば、ほんのわずかな日数で100人以上のフエゴ人〔フエゴ人全体の10%にあたる〕がこの病気で亡くなった」¹⁸⁶からである。彼はヨーロッパ人がもたらした結核にも、新規に入植してきたアルゼンチン人が持ち込んだ麻疹にも、フエゴ人は無力で、やがて絶滅するとの危惧を表明している。

1884年に実施されたヤーガン〔ヤマナ〕族のきわめて正確な人口調査が、全部で1000人という数字しか示していなかったことを想起するなら、この先住民がどんなにぞっとする割合で、彼らにとって新しい病の麻疹で死んでいるかがわかるであろう。この疫病の詳細について伝えられている情報は痛ましいものだ。その侵入は突然であり、その蔓延は迅速であった。病原菌がアルゼンチン人によって持ち込まれたことは疑いを容れない。この惨事の広がりからして、この不運な部族は、文明の恩恵を知りそれに与る暇もないうちに、どんなに簡単に、どんなに急速に消滅するか予測することができようというものだ¹⁸⁷。

¹⁸⁴ イヤードによる脚註：「ウシュアイアの伝道会のイギリス人に結核に罹った病人がいたことをわたしは確認している。」

¹⁸⁵ P. Hyades, «Sur l'état actuel des Fuégiens de l'archipel du cap Horn», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VIII, 1885, p. 208.

¹⁸⁶ *Ibid.*, p. 209.

¹⁸⁷ *Ibid.*, pp. 209-210. この引用末尾の文は、同じイヤードのつぎの不気味なことばと交響している。「フエゴ人は地表から完全に消滅するのに数年の問題でしかない民族のひとつである。いまこのとき、彼らはもはやたったの300ないし400人しか存在していないからだ」。A. Lefébure et S. Charon, «Chez les Indiens du cap Horn», in O. Loiseaux (dir.), *Trésors photographiques de la Société de géographie*, Paris/Grenoble, Bibliothèque nationale de France/Glénat, 2006, p. 56.

事実、伝染病のせいで先住民の人口は減少の一途をたどっていた。1864年から1880年までヤマナ族は3000人を数えたのに、1884年6月にはたったの949人に激減、1890年12月にはすでに300人しか生存せず、1900年にはヤマナ族という自立した部族はもはや存在しなかった¹⁸⁸。

とはいえ、種族の衰退という憂慮すべき問題はいまに始まったことではない¹⁸⁹。つとに、「ヨーロッパ人が歩をしるしたところはどこでも、死が先住民を追いたてているようなのだ」¹⁹⁰と書いたのはダーウィンであったし、1878年のパリ万国博で異文化展示を組織したエルネスト・アミーも『民族誌学評論』創刊号（1882年）の「序文」でダーウィンのことばを髣髴させて、未開人に対する文明国の責任を問うていたからだ。

未開人を根絶やしにする仕業はすさまじいスピードでつづけられている。白人種は世界各地に拡張する動きを見せるなかで、自分たちが歩をしるしたほとんど到るところで、新たな支配国の先住民が滅亡するのをまのあたりにしている。わずかな学者たちだけがこの哀れな劣等な人間が絶滅するまえにその特徴を確定させようと没頭している。

ようやく、あちこちでことの重大性を気にかけるようになった¹⁹¹。

ダーウィンが予感し、アミーが記述した、避けがたい絶滅過程にあるのはヤマナ族も同じだった。ヤマナ族が根絶やしの犠牲者であることを予告せざるをえないイヤード¹⁹²は、先住民が恐れていた文明こそが先住民の自由を脅かし、彼らを隷従させ、衰弱させ、彼らの肉体的・精神的な退廃を引き起こしている、と帰国後はルソー的な思考——善良な野蛮人——に回帰するのだった。もっとも、「善良な野蛮人」も「食人種」と表裏をなす、ヨーロッパが醸成したファンタズムでしかないのだけれども¹⁹³。

しかしながら、だからといってイヤードは全面的にヨーロッパ文明を否定するわけではない。イヤードは、1885年6月のパリ人類学協会会議の席上でもやはり、3月9日付のブリッジズからの手紙をもとにして麻疹の流行について報告をおこなっている。「この時点〔1885年3月9日〕で、先住民の人口は〔トマス・ブリッジズが実施した〕1884年6月の人口調査の時点よりも半分

¹⁸⁸ Ph. Revol, «Observations sur les Fuégiens : du Jardin d'acclimatation à la Terre de Feu 1881–1891», *cit.*, p. 277.

¹⁸⁹ C. Blanckaert, «L'ethnographie de la décadence. Culture morale et mort des races (XVII^e–XIX^e siècles)», *Gradhiva*, n° 11, 1992, pp. 47–65.

¹⁹⁰ ダーウィン『ビーグル号航海記』（前掲書）下、344頁。

¹⁹¹ E.-T. Hamy, «Introduction», *Revue d'Ethnographie*, t. I, 1882, p. II.

¹⁹² P. Hyades, «Rapport sommaire sur les recherches d'Histoire naturelle faites par la Mission du cap Horn», *cit.*, p. 40.

¹⁹³ 工藤庸子、前掲書、42頁。

以上も減少していた。この身の毛もよだつ死亡率の原因は肺結核であったが、しかしとりわけ麻疹であった」¹⁹⁴と述べてから、特筆大書すべきは、ウシュアアイで宣教師たちと接触して麻疹に罹ったフエゴ人が多いのに対して、フランス科学調査団と接触していたヤマナ族は麻疹に罹患していないことだという。これはオレンジ湾のヤマナ族が本来の野外生活をつづけ、ウシュアアイにおけるように狭い空間に閉じこもることがなかったからであり、女より男に死亡率が高いのも、男はヨーロッパ人と接触することが女より多いのに比して、女は野外で時間を過ごすことが多く、海岸で魚を獲ったり貝を採集したりしているからだといヤードは考えている¹⁹⁵。フランス科学調査団と接触した先住民からは疫病患者が出ていないという、イヤードのこの指摘に注目したい。というのは、この経験則が彼の文明否定を妨げているように思われるからである。

前掲した1885年3月のパリ人類学協会会議での発表——フエゴ人絶滅の警鐘を鳴らした発表——のあとでいろいろな議論が出されているのだが、そのうち当時的人类学・言語学の大御所アベル・オヴラックは先住民の滅亡の原因に関して、とくにキリスト教伝道会によって引き起こされる精神的退廃と肉体的退廃の関係を指摘している。西洋文明と未開人が接触することで、文明は未開人のところに過度の興奮を重くのしかからせることになり、そこからくる生理的な衰えのせいで、病気が広まりやすい状況になっていたのではないかという。オヴラックは先住民における疫病流行の一因をとくにキリスト教に認めているようで、キリスト教のせいで知的に墮落したことが生理的な悪化に反映されたとみる。「プロテスタントおよびカトリックの伝道会については、〔中略〕それらが先住民をつねに、どこにおいてでも退廃させていることはわたしにとって一点の疑いもない。すなわち、伝道会はことのほか偽善を先住民に教えたのです」¹⁹⁶。これに対して、イヤードは宗教が先住民を墮落させたことは認めても——「宣教師たちの影響が未開人のところに無意識のうちに生長させた偽善については、わたしは完全にオヴラック氏に賛同します」¹⁹⁷——、文明が文明を知らなかった先住民に極度の興奮を与え、それが彼らを精神的愚鈍に陥らせ、その反映が身体にも現れて衰弱していったという、オヴラックが唱える因果関係には同意しなかった。「ヨーロッパ人と未開人の接触が及ぼす精神的な影響が人口減少の原因だと本気で見なすことを、わたしは背わない」¹⁹⁸。つまりイヤードはヨーロッパ文明が先住民にマイナス面だけをもたらしたと見なすことに与しないのである。その根拠は、フランス科学調査団とヤマナ族の接触にはマイナス面など認めえなかったことにある。オレンジ湾では疫病が猖獗することはなく、科学調査に彼らは知的興奮を覚えていたという自負があるからである。イヤードはこう

¹⁹⁴ P. Hyades, «La rougeole chez les Fuégiens», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, t. VIII, 1885, p. 462.

¹⁹⁵ *Ibid.*, p. 463.

¹⁹⁶ P. Hyades, «Sur l'état actuel des Fuégiens de l'archipel du cap Horn», *cit.*, 1885, pp. 213–214.

¹⁹⁷ *Ibid.*, p. 215.

¹⁹⁸ *Ibid.*

つづける、「オレンジ湾でわたしたち調査団の周辺に暮らしていたおよそ100人のフエゴ人のうち、だれひとりとして結核で死んだ者はいない。それでいて、彼らは知的な熱狂で絶えずかき立てられる理由をそこに見いだしているのです」¹⁹⁹、と。イヤードには、オレンジ湾の先住民とともに科学に奉仕するためのテリトリー、いわば理想の共同体をそこに打ち立てようとする意図が働いていた。だから、フエゴ人の人体標本にも石膏取りにも、彼の良心は痛むことがなかったのである。すべては科学のためである。なにせ、「科学は、人類に付き従うためでなく人類を統率するために人類の上に君臨する厳かな女神であり、断じて服従することなく命令するためにあるといえるのはただ科学のみである」²⁰⁰から。文明によるフエゴ人の全滅を危惧し、かつ告発しつつも、イヤードは自分の時代の科学と技術の進歩にはなんら疑いをはさんでいないのである²⁰¹。

『報告書』第7巻における「フエゴ人に対する文明の影響」と題された重要な一節で、オレンジ湾でのフエゴ人を観察したかぎり慣習は文明で変質することはなかったが、ウシュアイアの先住民にはイギリス国教会の伝道所や、アルゼンチンの行政支所（郡庁 *sous-préfecture*）設置の影響で慣習は顕著に変形してしまった、とイヤードは繰り返し指摘している。当該の節でいう「文明の未開への影響」は、すでに前述した（1）伝道会の影響、（2）ヨーロッパ人がキャリアとなって持ち込まれた伝染病、の2点に基本的に絞られる。

前者（1）についてまず、「宣教師は先住民にキリスト教を教えるのを主たる目的としてもたねばならなかったのは明らかで」あり、「異教徒、物神崇拜者を改宗させることが重要なのではなく、何もけっして崇拜したことがなかった人びとに信仰心と複雑極まりない教義をもたらしことが重要だった。この任務を後退させないためにも使徒の信仰と精力をもたねばならなかった」²⁰²、とキリスト教布教の本分のなんたるかを述べる。彼らはフエゴ人のところにキリスト教的観念のいくつかを行き渡らせることで満足したが、実際は南米伝道会から遠く離れてノマドの生活をしていた先住民には根づいていなかった。宣教師の言い分はこうだ。宗教概念は多かれ少なかれヤマナ族に導入され、それが風習を改良し、子殺し、一夫多妻制のような野蛮な習慣を消滅させ、悪しき本能を矯正し、徳高き感情に目覚めさせた、と。だがこの影響力は、ウシュアイアの伝道所に住みついた先住民はともかく、移動生活をするヤマナ族には及んでいないのだ。しかしだからといって、伝道所の外では宣教師の影響が皆無だったとはいわない。伝道会の教育のおかげで、先住民は難破者を救助するようになったし、外国人が自分たちのテリトリーに居を構えても我慢

¹⁹⁹ *Ibid.*

²⁰⁰ P. Broca, «Histoire des progrès des études anthropologiques depuis la fondation de la Société» (1874), *in id.*, *Mémoires d'anthropologie, op. cit.*, p. 498.

²⁰¹ この点で同時代の地理学者エリゼ・ルクリュ *Elisée Reclus* に類似する。F. Ferretti, «Un regard hétérodoxe sur le Nouveau Monde : la géographie d'Elisée Reclus et l'extermination des Amérindiens (1861–1905)», *Journal de la société des américanistes*, 99-1, 2013, pp. 141–164.

²⁰² P. Hyades, VII, p. 385.

するようになったし、フランス科学調査団がオレンジ湾のフエゴ人と悶着を起こすこともなかった²⁰³。

しかし、ウシュアイアに定着しなかったヤマナ族に及ぼした伝道会の影響はそれだけに留まる。その理由はイヤードがすでにほかのところで発表していたように、文明生活に触れた先住民は結局逃げ出して、文明の跡を留めない自立したノマドの生活に戻っていくからである。子殺しとか一夫多妻制のものと未開生活というけれど、例外的なものは措いてほぼそのようなものは存在しないのである。イヤードは折あるごとに唱えてきた主張を繰り返すことになる。文明のおかげで伝道所周辺に定着したフエゴ人が得たものは、垣根に囲われた小屋であり、衣服であり、ヨーロッパからもたらされた食べ物であった。だが失ったものは貧窮者を援助する慣習であり、カヌーを製作する術であった。野外での移動生活の労苦は、厳しい天候から保護された安逸の生活に取って代わられた。爾来、フエゴ人は定住者となりせいぜい旅するだけの人となって、身体を動かすのも必要最小限だけになり、空気が閉じ込められた住まいに暮らし、換気も不充分になった。致死率の高い疾病の罹患性が増大したのはまさにこの体力衰弱に一因がある。だからウシュアイアの伝道所に住む先住民に肺結核が多発したのだ。死に到る疫病が先住民を急速な減少に追い込んだのは偶然ではなく、残念ながら現状では、文明の諸要素に触れたせいでフエゴ人が短期間に消滅することを予測させる²⁰⁴。イヤードはここでも不気味な予言を反芻していることになる。そしてイヤードのこの主張は、ブリッジズ家の年来の友であり、一家からトマスのヤマナ語辞典を監修して「序文」を書くよう依頼されていたウィリアム・バークリー William Barclay²⁰⁵が1926年に表明した意見に驚くほど呼応していることも指摘しておかなければならない。雨が降っても雨滴は裸のフエゴ人の鍛えられた皮膚を伝い落ちるだけだが、湿っぽい服を着たまま終日カヌーで漁撈すればかえって悪寒に襲われるし、設備の整った木製の小屋に身を寄せ合って冬を過ごせば、肺病、インフルエンザ、天然痘、麻疹の流行の犠牲者となる。ヤマナ族には寒いがまま空腹がままにさせておいてよいのだ。そのほうが彼らは健康なのだから。フエゴの水気を多く含んだ土壌に蕪の植え方を教えてやるよりも、すぐれた漁民としてビーグル水道で魚群を追ったり貝類を採集したりするほうがよいのだ。だからわざわざ食事を変えずとも、彼らには十分な食糧補給が確保されているのだ。白人の教化目的のことは聞き入れた代償がフエゴ人の墓であった²⁰⁶。事実、そのとおりになった。

上記の后者(2)についていえば、伝道会に代わってウシュアイアの主となったアルゼンチン政府は、フエゴ人を労働者として雇用し、アルゼンチン人とフエゴ人との結婚もいくつか実現させ

²⁰³ *Ibid.*, p. 386.

²⁰⁴ *Ibid.*, pp. 387–388.

²⁰⁵ L. Bridges, *op. cit.*, p. 535; traduction française, *op. cit.*, pp. 615–616.

²⁰⁶ A. Chapman, *op. cit.*, pp. 490–491.

た。「文明とのこの新たな接触の結果が、フエゴ人の慣習の観点からしてどんなものになるのかはわからない。しかし大きく変容することになるのは明らかだ」²⁰⁷、と南米伝道会につづくアルゼンチン政府とフエゴ人の接触にもイヤードは懸念を表す。1884年にアルゼンチン政府はウシュアイアに郡庁を設置、1889年にもうひとつ郡庁をブエン・スセソ（グッド・サクセス）湾に設置と、マゼラン海峡の島嶼は徐々に文明人に侵入され、あろうことか、ホーン岬からマゼラン海峡に到るティエラ・デル・フエゴは大胆不敵な開拓者たちの関心の的となって、農業事業に参画する者、金鉱を探索する者が続出する始末である。このころ、チリ政府もチリ最南端の植民地化を推し進め、みるみるうちにウシュアイアの伝道会の影響力は無に等しくなる……²⁰⁸。

1884年6月時点でのヤマナ族絶滅の危機を数字で示したあとで、イヤードはつぎのようにまとめて『報告書』第7巻を終えている。「したがって、文明の恩恵に与る間もあらばこそ、フエゴの哀れな未開先住民がどんなに簡単に、どんなに迅速に消滅するか予測できる²⁰⁹。白人との接触で未開人すべてを全滅させるのは運命的にして不可解な掟の結果ではない。未開人はこうした状況にあっては文明人が持ち込んだ病気がもとで、そして容赦ない暴力と無縁だった土地ではその病気が進行するものなので、簡単に滅び去るのである」²¹⁰。

結語

ポール・イヤードがティエラ・デル・フエゴを訪れてから現在までおよそ135年の時間が流れた。そしてイヤードが危惧したとおりに、20世紀中葉にフエゴ人とその文化はほとんど絶えたとされる。行政の無関心、混血、生存者の四散などのせいで、この絶滅の年表を明確に確定することはできない²¹¹。平和を好むハウシュ族最後の男性（混血）は1981年に、生粋のセルクナム族最後の女性は1999年に死亡してこれらの部族は途絶えたとされることもあれば、ヤマナ族最後の女性クリスティーナ・カルデロン²¹²は2017年にも89歳で存命中であり、生粋のアラカルフ族は2006

²⁰⁷ P. Hyades, VII, p. 388.

²⁰⁸ *Ibid.*, pp. 388–389.

²⁰⁹ «On peut donc prévoir avec quelle facilité et quelle rapidité disparaîtra la malheureuse peuplade fuégienne, avant d'avoir eu le temps d'apprécier les bienfaits de la civilisation». この言い回しは、1885年発表の論文「ホーン岬島嶼のフエゴ人の現況について」（前掲）末尾にある、「On peut prévoir aussi, d'après l'étendue de ce désastre, avec quelle facilité et quelle rapidité disparaîtra cette malheureuse peuplade, avant d'avoir le temps de connaître et d'apprécier les bienfaits de la civilisation.» (P. Hyades, «Sur l'état actuel des Fuégiens de l'archipel du cap Horn», *cit.*, p. 210) とほぼ同一である。このふたつのテキストのあいだには6年の歳月が流れている。

²¹⁰ P. Hyades, VII, p. 391.

²¹¹ Ph. Grenier, *Histoires du bout du monde*, *op. cit.*, p. 1060.

²¹² Cf. A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, pp. 17–24.

年の時点で15人が存命だともいわれるが²¹³、その後はどうなったのか知るよしもない。ただ確言できることは、生粋のフエゴ人は絶滅したに等しいということである。

キリスト教の伝道による文明化、白人が新しくもたらす病気、そして白人による虐殺²¹⁴という道筋で先住民が絶滅したり危機に瀕したり、あるいは白人文化に統合されていくのは、もちろんなにもフエゴ人だけがたどった道ではない。インカ帝国やアステカ帝国の滅亡、カリブ族、アメリカ・インディアン、タスマニア・アボリジニ²¹⁵、オーストラリア・アボリジニの運命などがただちに想起されるだろう。これらは往々にして「文明」と「野蛮」、 「西洋中心」と「周縁的他者」といった二項対立的な概念や、入植者側が征服を正当化する「墮落した先住民」と継続支配を正当化する「救済可能な先住民」といった二律背反的な概念を援用して説明される。しかし本稿では、ヨーロッパ世界と非ヨーロッパ世界の相互関係を探るひとつのケース・スタディとして、フランス人科学者たち、とりわけポール・イヤードとフエゴ人という異文化接触の実態を追究した。あわせて、その異文化交流にたんなる二項対立的な要素のみを見て、否定的な側面をことさらに強調することでこれを告発・断罪するのを差し控え、むしろイヤードのフエゴ人弁護に見られるような、肯定的な一面にも照射することを心がけた²¹⁶。加えて、イヤードの時代における人種差別

²¹³ アン・チャップマン『ハイン 地の果ての祭典——南米フエゴ諸島先住民セルクナムの生と死』大川豪司訳、新評論、2017年、4頁を参照。しかし1926年の時点でハウシュの最後の老婆がひとりだけだったという説もある。L. Thomas, «Des peuples en voie de disparition : Les Fuégiens», *cit.*, p. 388.

²¹⁴ 1886年以降、フエゴ人虐殺が顕著になった。ひとつは、牧羊場経営のために白人が先住民の土地を収奪し虐殺したことである。アルゼンチン政府が入植を認めたために、ヨーロッパ人が牧羊場を増やすべく、セルクナム族の住むイスラ・グランデにおける土地の収奪を加速させ、有刺鉄線で放牧場の囲いをつくっていった。この牧草を食用としていたグアナコは羊の草を食べてしまう厄介者であるだけでなく、飼い犬の餌にするためにも、ヨーロッパ人はグアナコを殺していった。ところがグアナコはセルクナム族にとって食糧と衣服に欠かせない貴重な存在であった。ジュリウス・ポベルが「彼らはいつもグアナコの肉が本当に好きなのだ」¹だの、「彼らはグアナコの毛皮のマントを除いてなにも衣服を着用しない」²だのと指摘するほどだった (J. Popper, *The Popper Expedition. Tierra del Fuego, op. cit.*, pp. 37, 33)。このために、セルクナム族は入植者と対立せざるをえなかったのである。しかし彼らに勝ち目はなかった。牧羊業者と彼らに雇われた牧童はセルクナム族虐殺に乗り出す。獲物のように先住民を狩り出し、カービン銃の銃火を浴びせるのだった。もうひとつは、ゴールド・ハンターによる金の採掘とセルクナム族虐殺である。ポベルやアルゼンチン将校ラモン・リスタ Ramón Lista らによる虐殺がよく知られているが、これらについては改めて論じられるべき話柄である。ちなみに、チリ政府もアルゼンチン政府もこの虐殺をほとんど見て見ぬふりをしていたようで、リスタは1890年にサンタ・クルス行政管轄区域総督を任命されている。

²¹⁵ カトルファージュは、タスマニア・アボリジニがヨーロッパ人と接触してからたかだか72年ほどで絶滅したことを惜しんでいた。A. de Quatrefages, *Hommes fossils et hommes sauvages. Etudes d'anthropologie*, Paris, Jean-Michel Places, 1988 (1884), pp. VI, 298.

²¹⁶ 実際、ドイツ人人類学者マルティン・グシンデは、フランス科学調査団が人類学的観察のために細部にこだわった解剖学的研究——微に入り細を穿った人体測定表を想起されたい——をおこなったことに批判的ではあるものの、「[科学調査団の] すべてのフランス人、とりわけイヤードは自分たちを取り巻いていた未知なるものを正当に評価しようと努めた。彼らはフエゴ人の人喰いとか精神的劣等性という誤った糾弾に反対する明確な立場をとった」 (A. Chapman, C. Barthe et Ph. Revol, *op. cit.*, p. 46) と肯定的な評価を下している。

的なパラダイムで、人類学あるいはパリ人類学協会がフエゴ人を、そしてイヤードの弁護をどのように解釈していたのかを垣間見ようとした——イヤードの仕事は少なくともレオンス・マヌーヴリエ Léonce Manouvrier, カトルファージュ, ドリール, ジョゼフ・ドニケール Joseph Deniker から支持され、その後はしばらく忘却されたが、20世紀になって人種主義的思考の桎梏から解放された文化人類学が出現するにつれて、彼の民族誌的射程が再評価されるようになった²¹⁷。

とまれ、イヤードは現地に滞在して濃密な一年間を過ごし、フエゴ人の言語をかなりよく理解し²¹⁸、参与観察したのだから、立派に人類学的なフィールドワークを実行したといえよう²¹⁹。イヤードの時代によくあったように、旅行者のような——それはえてして先住民に批判的で、ありもしない近親相姦とか人喰いを見ようとしがちな——通りがかりの観察に信をおくのではなく、フィールドワークをとおして調査したおのれの観察眼に信をおいたのである。さらにいえば、フランス植民地主義の時代の科学者には珍しいヒューマニズムを具えていた。人間性の名において、イヤードは未開人に向けられた軽蔑と暴力を告発し、こうした先住民を動物のレベルにまで貶める意見にも頑として反対しつづけ²²⁰、急増する死亡率がフエゴ人の間近い絶滅を避けがたく運命づけていただけに力を込めて彼ら未開人を弁護したのだった。イヤードは科学者であると同時にヒューマニストでもあったのである。

²¹⁷ Ph. Revol, «Observations sur les Fuégiens : du Jardin d'acclimatation à la Terre de Feu 1881–1891», *cit.*, pp. 286, 288–291. 20世紀フランスではマルセル・モース Marcel Mauss がもっとも早くイヤードの仕事を喚起している。M. Mauss, «L'ethnographie en France et à l'étranger», *La Revue de Paris*, 20^e année, t. V, 1913, p. 826. その後アメリカ人人類学者ジョン・クーパー John Cooper が『報告書』第7巻を「ヤーガン〔ヤマナ〕人類学の現存するもっとも重要な研究」と評価した。J. M. Cooper, *Analytical and Critical Bibliography of the Tribes of Tierra del Fuego and Adjacent Territory*, Washington, Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 63, 1917, p. 99. ちなみに、ジュール・ヴェルヌ Jules Verne は死後出版された『マゼラン地方にて』*En Magellanie* (1897–98年執筆, 1909年出版)の材源のひとつにイヤードの「ホーン岬の一日」を利用し、作中でフランス科学調査団に言及している。J. Verne, *En Magellanie*, éd. O. Dumas, Paris, Gallimard, coll. Folio, 2011 (1987), pp. 13, 280.

²¹⁸ トマス・ブリッジズはイヤードがヤマナ語に関心を抱いていたことを明かしている。「イヤード博士は疲れ知らずで、病気から助けてやるためにけっして努力を惜しなかったし、どんな状況にあってもとても快活であった。彼は先住民に強い関心を寄せ、ヤーガン〔ヤマナ〕語でがんばって話しかけようとして、そうすることによりオレンジ湾でかなりの語彙を蒐集した」(Ph. Revol, *ibid.*, p. 270)。その主なものは P. Hyades, VII, chap. VI, «Langue», pp. 260–337に収録されてある。

²¹⁹ 池田光穂「ダーウィン『ビーグル号航海記』におけるフィールドワーク」、『熊本大学文学部論叢』第77巻, 2003年, 47頁。

²²⁰ これについてもルトウルノーを引き合いに出さざるをえない。1901年にもなお、彼はフエゴ人を「ほぼ類人猿と呼んでもいいくらい発達していない」と断じてはばからず、しかもイヤード博士の名前を引用せず——脚註に出典は表記しているものの——、それどころか博士を「フエゴ人についてはほとんど偏向した旅行者」と形容して、イヤードの功績を認めようとしない。Ch. Letourneau, *La Psychologie ethnique*, Paris, C. Reinwald, 1901, pp. 155–161. ルトゥルノーの立場をとる学者はほかに、オヴラック, ガブリエル・ド・モルチエ Gabriel de Mortillet, ギュスターヴ・ル・ボンらがいる。Ph. Revol, «Observations sur les Fuégiens : du Jardin d'acclimatation à la Terre de Feu 1881–1891», *cit.*, p. 257 を参照。

しかしながら、科学調査団参加は彼のところに深い破断を残したに違いない。医師として、一証人として、ヤマナ族の絶滅をついに防げなかったことであり、病気の、貧窮に喘ぐウシュアイアの人びと、未開状態のなんたるかを示してくれたオレンジ湾の人びとを尻目に立ち去らざるをえなかった——つまりは見捨てざるをえなかったことである。

イヤードとフェゴ人との交流にはもちろんヨーロッパ中心主義的思考が濃厚に看取されるが、それでもイヤードのフェゴ人に対する真摯な姿勢はやはり評価されてしかるべきだし忘却されるべきではない。同様に、ヨーロッパ人が持ち込んだ病原菌の犠牲となったフェゴ人と文明の功罪に改めて思いを致すべきであろう。19世紀フランスの地理学者エリゼ・ルクリュ *Elisée Reclus* の正鵠を射たことばを想起こそ、*「〔フェゴ人〕は動物と同様、成長することも学ぶこともできない、猿よりかろうじて上位にある『類人猿』のように、人類に属さないものとしてよく表わされる。しかしながら、ブリッジズやそのほかの熱心な宣教師たちが試みた教育がその正反対であることを証明している。フェゴ人も人間であり、彼らの殲滅は、タスマニア人や白人に抹殺されたそのほか多くの人種の根絶やしと同様に、犯罪となろう」*²²¹。そう、フェゴ人は人間であり、彼らを絶滅させたことは紛れもない犯罪なのである。

²²¹ E. Reclus, *Nouvelle Géographie universelle. La terre et les hommes*, t. XVIII, Paris, Hachette, 1893, p. 767. ちなみに、エリゼ・ルクリュは大著『新・世界地理学』でフェゴ人を記述するときに、イヤードの『報告書』や論文を参照している。したがってフェゴ人を人喰いだとみなすのは「妄想」だとしてにべもなく否定している (*ibid.*, p. 765)。イヤードの無念さはこれでいささかなりとも晴れたとすべきか。

